詩集

死刑宣告

死刑宣告

萩原恭次郎

死刑宣告

萩原恭次郎

萩原恭次郎

死刑宣告

東京

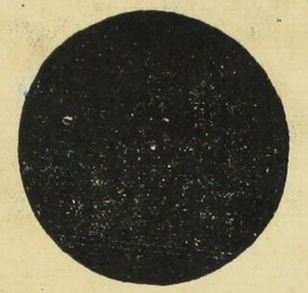
長隆舍刊

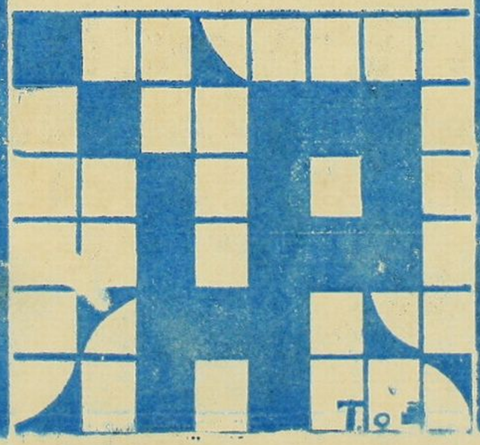
光利宣告

萩原恭次郎

萩原恭次郎

死刑宣告





綾里藏書

死刑宣告

詩集

萩原恭次郎著

一千九百二十五年九月初版
一千九百二十六年二月再版
東京
長隆舍出版

挿畫製作者及目次

高戸ペ萩富澤坂矢柳榎　岡
見田一原永　田橋川本　田
澤タ恭　寿　知
路達一夫　玄　市公槐喜　龍
直雄ス郎矩烏郎麿人男　夫

11. 17. 34. 41. 48. 56. 73. 80. 91.
106. 128. 145. 151. 155. 157.
62. 63. 93. 111.
72. 119. 129.
35. 49.
92. 107.
1. 8. 15. 129
156.
86.

萩原朔太郎寫眞版
凸版印刷
タ・ヒ・ス・ヤ・チ
岡ノ・ミ・ヴ・ッ
イフ・ス・ヤ・ッ
大ノ・ス・ヤ・ッ
柳ノ・ス・ヤ・ッ
牧ノ・ス・ヤ・ッ
村ノ・ス・ヤ・ッ
ト田フ・ス・ヤ・ッ
ン夫イ・ス・ヤ・ッ
沖瀬　山
龍ミヤヴ周正　壽
藏夢雄義

第二版の序

● 初版を市場に送つてより、約百日にして第二版を印行する事を得た。その間、發行書店は發賣方法として、新聞・雜誌に何等一つ廣告を出さず、ポスター一枚をつくらなかつた。けれ共、新聞及び雜誌には、近來發行された書物で、これ程多くの批評や感想の續出したものは無いであらうと、語つて呉れる人がある程だつた、

中にも、辻潤、高橋新吉、神原泰、橋爪健、赤松月船、大木篤夫、生方敏郎、萩原朔太郎、諸氏及び川路柳虹氏の諸氏には、づい分と過褒な批評を頂いた。及び數十枚の批評を雜誌『日本詩人』に發表して呉れた人を初め、二三の篤實

なる批評を投じて呉れた、初めて知る人もあつた

また、詩集祝賀會も東京で開催されると共に、京都・大阪・神戸の諸氏によつて、神戸でも開かれた、まつたく私としては意想外の感喜と感激である。

――と共に、ショウペンハウエルがある自著の序に『人間の大多數は天性、殆んど信せられない程、實利以外に把握する力がないのである。――一體總ての人、否多數、否少數の人でも、正直にそれに同情すると望むのが間違つてゐる』と言ふ言葉を、心ふかく思ひ合せてみないわけてはない。けれ共、よろこびはよろこびてある

●

さるにしても、この詩集の過渡期にをける智識階級者としての私自身の苦惱、焦燥、疲勞、沒落と云ふ、必然的過程の、かゝるまでの生活解體から、更に追

窮されて、一つは無產階級藝術の綜合的形態の創造、また一つは、積極的鬪志の現れを望んだ、藝術的陶醉から離脫して、生活精進の湧發する所のものを意圖とした、『日比谷』以後の作品が、餘りに前半の作品に比して批評なきを、不思議に感ずる

實際、われ等は多くの苦惱を經る。苦惱を正直に受ける者に、初めて苦惱の底から何等かの一條の新路を發見する。如何にしてもその道を擇ばねば生きてゆかれない新路である。その新路こそ我等に眞理の道だ。我々は只、この道を突進してゆくより外にない。後半の作品はすでにこの道に出發してゐる作品だ。私自身の生活に、讀者の生活に、プロレタリアチックなある精進をのぞんでゐる作品であると、信じてゐるが、それも私の表現の拙さと、その幼稚と、諸君に見なれざる事に因るものであらうか、再版を手にした讀者は、あれ等の中の

二三にても、檢討的精神をもつてのぞんで貰へれば幸の至りである。

●

終りに、再版の裝幀は初版の裝幀よりも、少し明くするために、箱●表紙●扉●カット二枚、寫眞版の挿入等變更された。その他すべて初版に等しい。それから私は、この詩集は再版と共に、以後絶版にしやうと思つてゐる。私はこれ等の詩を私自身から理由なく廢棄したいからである。また幾版も版を重ねる事を、それ程よろこびとも私は感じないからである。

千九百二十六年一月

萩原恭次郎

序

●

私の詩への警告●●

私の詩をデカタンの如く思ふ者、それ自身が一つの嘲笑はるべき近視眼だ！

私は私の詩集に「野獸性なる人間的なる愛の詩集」と名づけたく思ふ程の、いはゆるデカタンを擯斥する者である。必然にデカタンに追ひ込まんとする近代文明的所設の諸手段に、私は貫通する意志を持つ私が解體する如く見える日の自分を、意地の惡い噴怒と嘲笑とをかく

しまちえた日の、われ〳〵自身の「ブルジョア的（勞働者に對する資本家の意味に非ず）サヂイズム」に警戒せよ！

●

また私の詩に對する、喧騒●鳴動●雜音●醜惡の言を吐く、愚鈍なる彼女の心臓への發矢！

われ〳〵にとつて欲望はひるがへせない旗色鮮明なるモットーだ！

馴養されたる一切のアカデミーの非力への虐殺だ！

俗惡なれば、低劣なればこそ、と云ふ言葉は、すてに通行をゆるされない。輕蔑する！壓殺する！單にそれだけが持つ新價値！飼ひ馴らされたる番犬的精神のみが吠え猛る！彼等自身を盲目にした所の藝術

に、道徳に、一つの擁護運動として、

●

何物かを神聖化してゐねば、安心してゐられない群羊！神聖化する事によつて、自らを瞞着し、價値を認めやうとする憶病！汝自身を常に不自由に一つの檻をつくつて監禁し、汝自身を定形によつて住まはせねば安眠出來ぬ神經衰弱者！

偶像の義僕よ！

詩人は詩をつくり、詩人とは詩とは何ぞや？を完全に答へられねば何等かの權利を有しないと思ふやうな心！言はねばゐられない他へ對する自己の恐怖心にかくれた利巧！

詩を研討し詩の向上のためと云ふ事は、自らを安心させると共に、他のものに對する恐怖心をとりのけ、人々の自に、自分自身を立派なものにする、最も有効な方法ではあらうぞ！猿め！

然し、ほんとうの詩は、詩人は、「詩は斯うだ！」「詩は斯うしろ！」と云ふ旗印の下に戰ふことに成立するものでなく、むしろ全く、全然かゝる誤謬の旗下に戰はない事にのみ成立する。

●

されば私は私にとつてのみ必然なる詩の氾濫と噴出について、前もつて一言してをかふ。私の第一運動を經過した過去のために——

一篇の詩は、われ自身の國の中の音樂を聽くと共に、都會の雜音に

まぢる高架鐵道の轟音を聞く。輪轉機の音と側のペンの走る音と、一匹の蟲の音とを聞く。歡喜と哄笑と憤怒と泣訴と叫號と打擊は、一時の落下によつて、爆發し、甦生し、誕生し、疾走する。眞つ黄ろの噴煙は盛なる排出する心臓を壓搾する。

詩句を、一行を、散文の如く重荷を背にして疲れしむ勿れ！

次行まで叮嚀に運搬せしむ役を放棄せしめよ！各行各自に獨立せしめよ！獨持なる强烈なる哄笑であらしめよ！また絶叫であらしめよ！强き、强き感覺を齎らしめよ！

しからざる限りにをいては、一行自身が未だ全部露出しきらない間に、はや次の行に廻轉する急速なるテンポを一行に齎らしめよ！不發

の精神は爆煙を引きつゝ轉變して廻轉してゆくてあらう。

いとまなき新事實、いとまなき戰ひ！いとまなき變化――それが發狂に及ぶまての最高の興奮と陶醉に至るまての過程！

然して、われ／＼の美は平靜とクラシックの美と宗教的整調と重厚と獸性と處女性とボロ布れと南京蟲と貴婦人と自動車と入りまぢつてもまだ、私達の欲する美とは云はれない！

われ／＼の美は、欲情は、何處にさすらうか？

左りから書きつけて、右から書きつけて、上下から書きつけて、如何なる方面から讀んても、大小の活字を亂用しても、繪を挿入しても時間の許す限り、飽きるまで熱中しても、未だ未だ私達の美は求め得

られないてあらう。われ／＼の美は、欲情は、何處にさすらうか？

われ／＼の詩は全部てない！一部である。全體は無限てある。一部はただ加速度の廻轉をつづけるのみだ！一部から全體の意味を見出するよりない。されば遂に完全なるものへ到着する事は出來ない。不完全にのみ永遠の激しき姿はある。ただ怖ろしき鳴動のトンネルをくぐる。破壞と復讐と埋沒と甦生と一時に發動する中に、われ／＼の姿は激流を登る！

思ふ儘てある、感じたまゝてある。ただ走り出す、動き出す熱量である。力量てある。一切の最大目的を達せんとする無目的てある。現在と過去の生活を壓しつぶして進みゆく、僞善と飢餓の上を、自我の

貝殼の上を急行する巨大なる、ローラーてある。

ただに積極に！せめてわれ〳〵を慰するものは、善惡の批判を超えて、あらゆる權力を越えて罪惡に至るまての過程をふくむ、直行する意志てある、すてにわれ〳〵の精神の上に一つの高塔の建つを知る。一つの重なり重なりゆく姿を知る。また轟然と崩れゆくものを見る。そのかげに、蒼ざめ戰く、引き裂かる驚異、恐怖、歡喜は熱く冷く長く短く急激に一瞬に、もつれ渦まく飛散と躍動と沒落とを！一莖の花すらも蒼ざめブリキの如く感ず。擯斥と禁止と重圍さる抑壓の中に只僅かにも一言洩る苦しげなる聲！われは知る！こゝに共通する精神を！友を！群集を！時代を！こゝに知れ！われらの詩の喧騒を！泡だち

を！立體多層を！進みゆくものゝみの一大騒音を！非藝術を！（眞正なる藝術を！）人間を！

そしてまたわれ〳〵の憂鬱なる怠惰も！急走する破碎する力のよどむ、また一時に停止した時の、生活を！絶無を！空無を！惡戯を！平靜を！古代の精神を懷ふ！クラシックの美を思ふ、また彼等の偉大を！正氣を！に至るまての虚無の擴大を！

一廻轉毎に、豐富に微細に鋭敏に、伸縮發熱の度激しき最大無限のまたかかる虚無にまて、到達せんとする廻轉！廻轉！この廻轉の止む時に私の生命は死てある。この廻轉の軌道を外れた時に骸は横はる。

自由！自由！あらゆる奴隷よ去れ！汝自身のおこがましくも微弱な

る良心までも！恥づべき過去に、とり憑かれたる記憶に過ぎない良心までも、何等の願望を齎らさない所の――――

●

ただ、今私にあるものは、直行的なる一切のものに過ぎない！一種の動力的熱量に過ぎない！私は私の詩の友達に、それだけはぜひ知つて貰ひたい事である。そして第一期の私の意識的破壊の運動を全藝術に投彈し更に第二次にうつさうための過程を知つて貰ひたい。以後、私の詩は更に猛に破壊と創造の運轉を開始するだらう。そして私達のインテリゲンチヤの最後にまで到達し沒落するまでの期間を――――。

千九百二十五年九月

萩原恭次郎

詩集例言

一、過去の生活にとつて、私に勿論藝術生活なぞと云ふものは無い。私の詩は、その時々の慰樂であつた。されば、私の詩は詩自身で私の過去の全景を眺望され得ない。むしろその正反對である。

堪えまなき飢餓と、無名と、獨立と、孤獨と、鬪爭と、噴怒と、勉學と、云ふやうな外界の肉體的焦燥の疲勞と、暗き思索と、反省の、堪え間なき噛爭に、私は詩を思ふ程の、時間も無い程に、極度の疲勞を靴の先にぶらさげ乍ら生活した。深夜、疲勞のために眠れない間に、にぢみ出る思ひに、僅かなる述懐や惡戯を、斷片的に夢遊病者の如く、書きつけて寢臺の上に轉々としてゐた。

まつたく私の詩は、生活そのものでない。かゝる私の生活の時々の反映に過ぎない。今、詩集一卷とするに及んで、自らの何分の一も表出されてゐないのを發見して慚愧と悔恨の念に馳られてゐる。されば、私を識つて貰ふためには、一篇の詩よりも全篇を通じて私

自身を構成して識つて貰ひたい。今は之等の詩を一つの記憶として自分は廢棄するより無い。

二、集中の詩を大體九章に類別した。「裝甲彈機」篇最も古く、すでに五年前の作である。ただ懷かしさのために載錄した。掲載順はほぼ三四年來のものを創作年代の順序によつて配列した。今年に入つてからの作は、「煤煙」と「廣告燈」のみである。

とにかく詩集としてみやうと思つたのは、實に最近の氣持である。藝術に對する愛好の心持が知らず識らずの間に、自分に自己一個の獨特なる自信をもたせるやうになつて來た。それは詩に對する心も他の何事に對する心も、少しも變らないと云ふ事だ。て、出版の遲れ過ぎた事は、また止むを得ない。けれ共、私の詩は、今、漸く黎明を呼ばふとしてゐるらしい。今日の若き詩壇に、不思議にも私の詩は迎へられ、また多くの同傾向の詩人の簇出するのを目擊する。理由のない恐怖に似た羞恥と幸福を感ずる。

三、この詩集の命題は、最初「恭次郎の腦髓」とした。またスタイルも四六倍版、全アート紙に四號組みにする筈であつたが、思ふ所あつてそれらはみな變更された。二三の豫告を破約するため一言する。

されど、この詩集の裝幀も紙面構成も、未だわが國最初にして、新鮮なる發明を誇り得ると思ふ。これらの勞を快諾し、盡力してくれた岡田龍夫氏に、深く感謝する。別項同氏の一文を參照せられたい。

四、さて、また多くの挿畫を特にほつてくれた諸氏及び川路柳虹氏の私及び私の詩に對しての長い間のご好意に厚く感謝の意を表したい。

詩集 死刑宣告 目次 詩八十三篇

裝甲彈機 詩六篇

裝甲彈機……二
凸凹の皺……四
街上の歡聲……六
愛は終了され……九
群集の中に……一〇
恐怖に變色せし魂……一二

鮭と人間の定價50錢也 詩十七篇

夏の日の戀……一八
踏切り番の薔薇の花……一九
眞面目は乾物屋の乾魚……二〇
心臟をアルコールに漬けて……二一
鮭と人間の定價五十錢也……二二
レールの下の生活……二三
パンになるのかしら？……二四
卑怯者……二五

何が何やら復讐ですの……二六
豚は一匹をります……二七
自責は三行でも多すぎる……二七
ある男に對する輕蔑……二八
ドテッパラ……二九
東京通信……三〇
千九百二十三年……三一
葱と爆彈と女の足……三二
ヲンナを讃美する……三三

靜物は欠伸をする　詩十一篇

靜物は欠伸をする……三六
女の唇は嘘僞に割れてゐる……三七
コーヒー一杯で午前は終つた……三八
通過する一瞬時の醉ひ……三九
幽靈……四〇
深夜……四二
午前……四三
食事……四四
自らの額を割る日……四五

土鼠……四六
煤ケタ部屋ノ自畫像……四七

愛は悲哀の薔薇なり　詩八篇

○●……五〇
愛は悲哀の薔薇なり……五二
屋根裏の鴨……五四
縊死……五七
日比谷のベンチで……五八
カルタの札をかき廻してゐると……五九
夜……六〇
管と裂口とサナダ蟲め……六一

首のない男　詩八篇

首のない男……六四
闇の夜の記憶……六六
無題……六七
ある男と道を歩き乍ら……六八
墓場だ　墓場だ……七〇
おつ母さんと兄弟……七四

長い髪によごれたリボンを結んであそぶ彼の女……七六
父上の苦しみたまひし事を苦しまむ……七八

悪夢を噛んでゐる自殺者　詩九篇

俺は泥靴で泥の道を歩つてゆく……八二
悪夢を噛んでゐる自殺者……八三
孤獨は夢我夢中に遁走する……八四
壁の中につゝ立つてゐる男……八五
歪んだ不具な醜婦……八七
泥濘中の太陽を胸に燃やさない限り……八八
プラタヌナの葉のやうに……八九
秋……九〇
離れてゆく秋……九一

日比谷　詩七篇

日比谷……九四
無題……九六
廻轉する生命……九八
死は奴隷と主人に無關心である……一〇〇
自刻……一〇二

沈着と無口の秋……一〇三
地震の日……一〇四

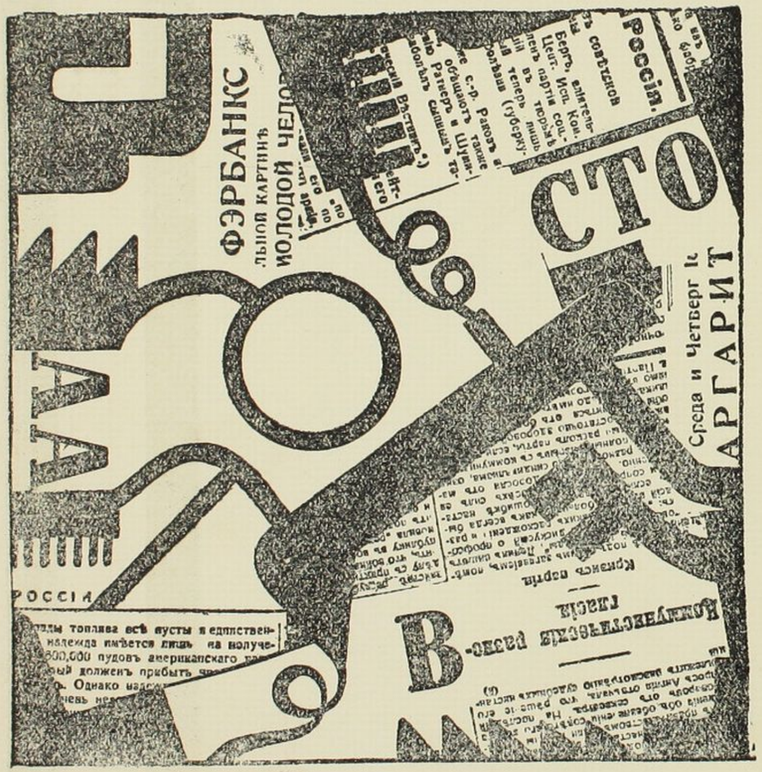
祈禱はマッチの棒一本で足りる　詩九篇

祈禱はマッチの棒一本で足りる……一〇八
戀愛の一音信……一一二
空は告知板に數字を明滅させる……一一四
地底の鐵管から朝は手を上げる……一一六
朝●晝●夜●ロボット……一一八
ボールを胸に掛けて走れ……一二〇
何百の眼球がつぶれ歪んだのだ……一二二
何物も無く進むのみ……一二四
人間の斷層……一二六

ラスコーリニコフ　詩八篇

ラスコーリニコフ……一三〇
廣告燈……一三四
秋は隔離と番號とビラをまいてゐる……一四〇
食用蛙……一四二
煤煙……一四六

裝甲彈機



生活あるはべつとに對する宣言……一五二
露臺より初夏街上を見る……一五八
……一六〇

●裝甲彈機

近代的都市の飛躍雜踏中に
我は裝甲の巨大なる彈機を見る
氣まぐれなる煙りを吐き乍ら
鈍重なる無愛嬌者

彼は軍隊式に聲を發し
都會の嗜好す
甘美や色彩や纖細を知らず
强い黃色の煙りを吐きちらし
都會をよごし氣をわるくし
驚き易い心臟を壓迫さす

彼は彈丸や群集の心に從はない
最も眞赤き野蠻な心臟をもつ
意のまゝ飽くまで

資本化した雜踏の世界に耐へ
混亂への强い强い出現！

おゝ　過敏なる女性美文明に
幅廣い肩をゆるがす無愛嬌者
喜びも悲しみも現せない
醜い顏をして

されど彼が泣く如き
强き頑迷なる心臟の閃き！
彼が熱意！
彼が力量！
彼が破壞！
彼が創造！
彼がまことなる强力の運轉！
文明への爭鬪！

あゝ　見る　我は現在！
巨大なる裝甲の彈機！
美しき近代都市の飛躍雜踏中に

凸凹の皺

目には幻む武藏野原の秋草よ！
青草原が踏みにぢられてより
生活の路上に
いくた祖先の生死の明滅が激昂せる世紀に呻いたであらう

見よ
無數車輪の叫喚
蹴りゆく靴鋲
方寸の隙なく
一瞬の安意なく

疾驅狂奔する
高熱患者の
利器の狂怒に
あゝ　絶えず
いぢりつけらるゝ道路の皺よ！

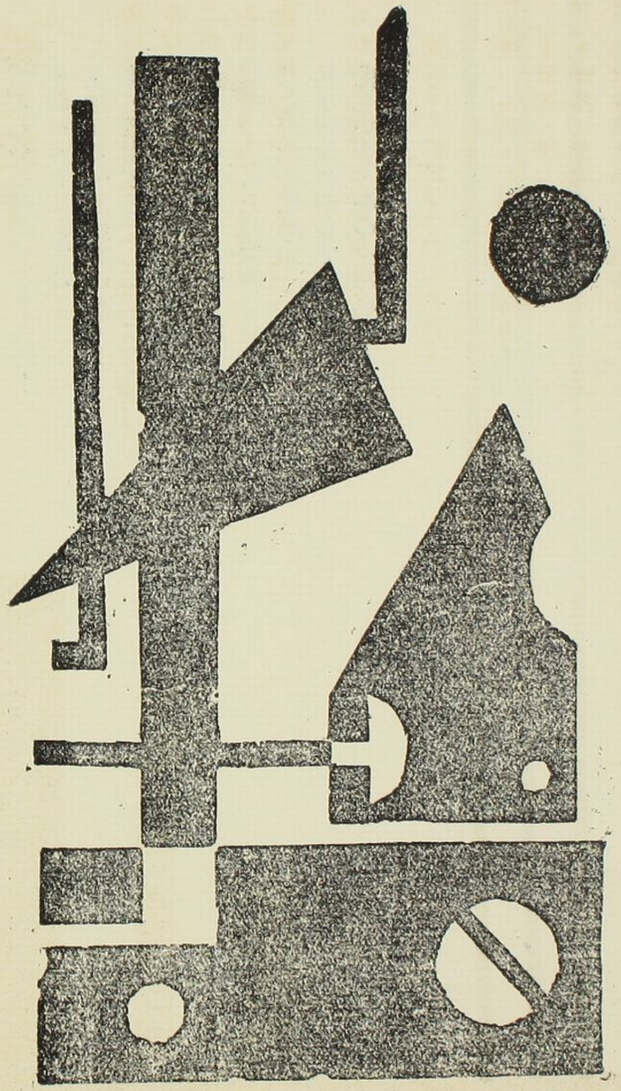
荒き凹凸の皺よ！
そは絶えまなき神經的な
都會の狂痴にまかしをる地の母のかなしき微笑！

あゝ　われらが生活はかく黃色の煙りを吐きちらし
目に青き草丘は消え
赤熱の汽鑵にも似たる叫喚か！
たどれば首府東京の曇空には
無數の黑煙と飢餓の夕なり！

街上の歡聲

誰だ　かの雜踏中に
破裂する汽鑵にも似たる喚聲に
自らに武裝し
短軀を火のやうに怒らし
一集團の中心となりて
街上に聲を放ちをる爭擾は
冬の夕暮れを
空に拋物線を描いて投ぜられるものは
彼等の靴か！　帽子か！
凶器か！
否！　否！　否！

それは群集にとりかこまれたる
悲しくも怒りたる一無產者の
憤ろしい砲彈のやうな肉體！
爆ねやう〳〵とする
危險なる一無產者の怒り！
彼が絕望と
彼が恐怖の固り！
おゝ　そして　どつと起りひろがる
群集の　街上の歡聲
其は何故の歡聲か
其は何故の歡聲であるのか
悲しい〳〵冬の夕暮れに——

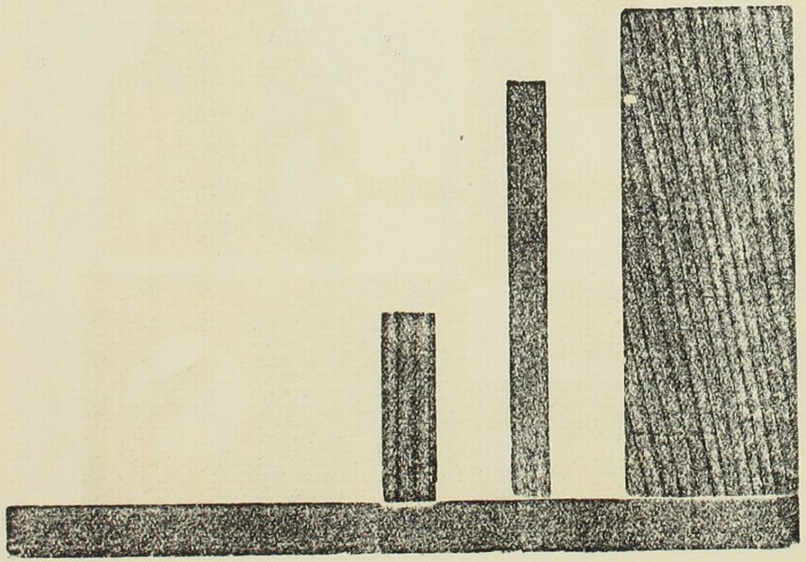


愛は終了され

母の胸には　無數の血さへにぢむ爪の跡！
あるひは赤き打撲の傷の跡！
投石された傷の跡！　齒に嚙まれたる傷の跡！
あゝそれら痛々しい赤き傷は
みな愛兒達の生存のための傷である！

忘れられぬ乳房はもはや吸ふべきものでない
轉居の後の如く荒れすたれ
あゝ　愛はすでに終了されたのだ！

さるを今　ふたゝび母の胸を蹴る！
新らしき世紀の戀人のため！
新らしき世界に青年たるため！
あゝ　われ等は古き父の遺跡を
見事に破壞するを主義とする！

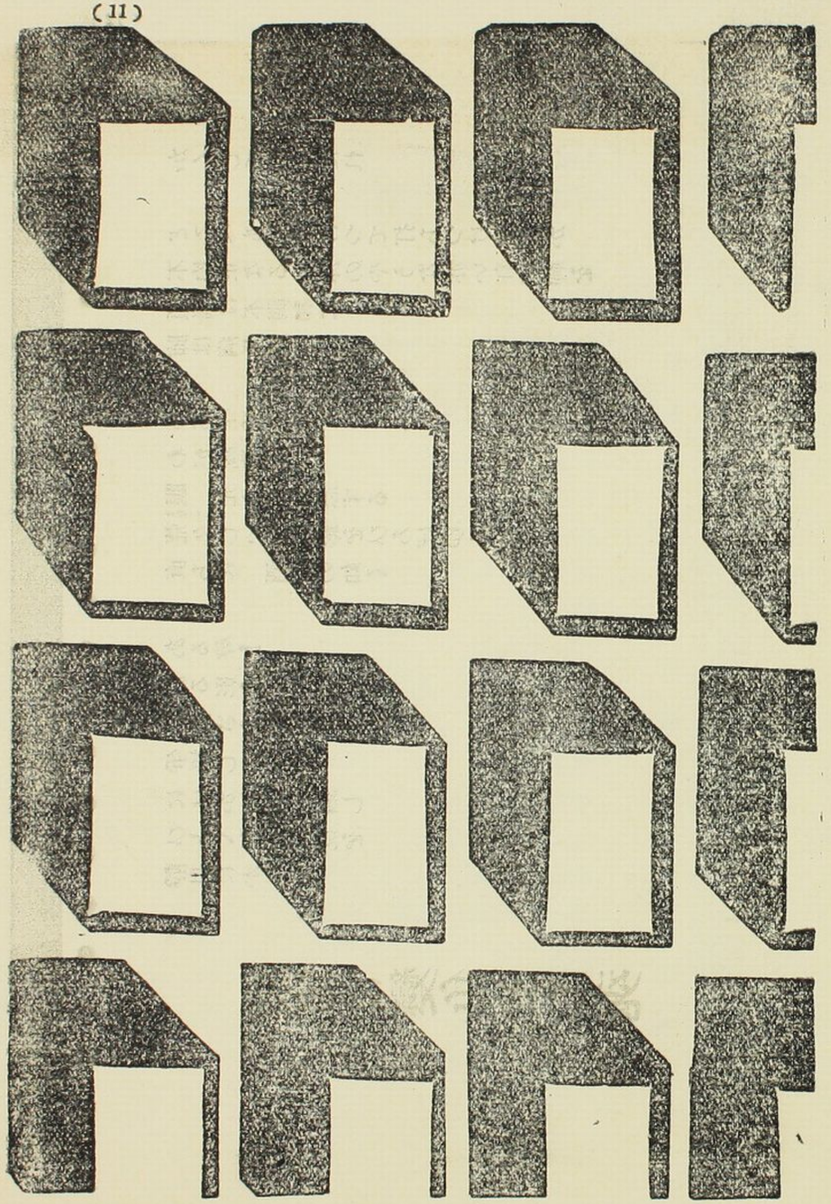


群衆の中に

群集の中に一人ぽつねん立つてゐる
其は立ちん坊より淋しい心である
樹の實が　樹に在るやうな靜謐さにて
滿たせない心は群集の中に目をつむつてゐる！

私のふところには
白紙一枚ないけれ共
飢餓から來る脅迫！
失業から來る白眼の冷嘲
そは口火つけられしダイナモの如きもの
しづかに燃えゆき
しづかに笑ひは眞の怒りに變はる！

あゝ　かすかにも遠く爆音をきく時に
われらの目はかつと見開か！！



恐怖に變色せし魂

靜思にかへる
ひとゝきの靜悅を
にはかに暗く翳し
爭擾し
驚動さす
ある影！
ある聲！

直ちに　酒精の如く
荒々しい酷な影をひろげゆく
眼（まなこ）　光らし憤怒する
わが感情！
わが生活！

肺は病巣に
頭腦は不調和に
不均正なる爆彈のやうな赤い狂精神を
どこへもつて行つて打ちつけやうか
かくして尾をたれ

止どまらうともせず
走驅し吠ゆ
ものかなしげなるさまに
突として
頭上に叱聲を聞き
怯へつゝも
憤りのがれ去る
わが感情！
わが生活！

さて今！
うろたへ
涕泣し
苦しげにも息づく惡戯を
見よ！
かの高き屋上より
インキの如く青く
たちまち黑く
石だゝみの上には
硬直の死があるを知りつゝも
空を目がけて飛び上らんとする
衰弱せる理性を！

疲頽せし生活の夕景を
不吉なる顏し

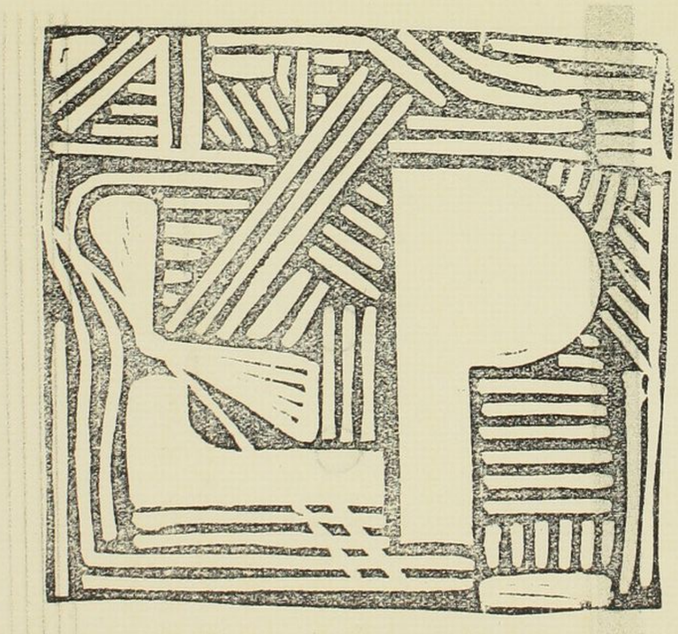
蒼白き靄の水邊を
醉歩し横行し哄笑しゆく
恐怖に變色せし魂！
おろかしきまで
砲彈のやうに
慟哭し
咆哮したき
憤ろしき怒りも消えつかれてねむる夜半

煙りなき陰鬱の無數の
煙突のあたり
幾多の黑い柩車が運び出される
●●●怪獸の如き都會よ！

あゝ　白書！
街上に立ち
煙草ふみにぢるとき
目前に雜鬧なすものは
墓樹をさはがす風の如き
人々の群れ！

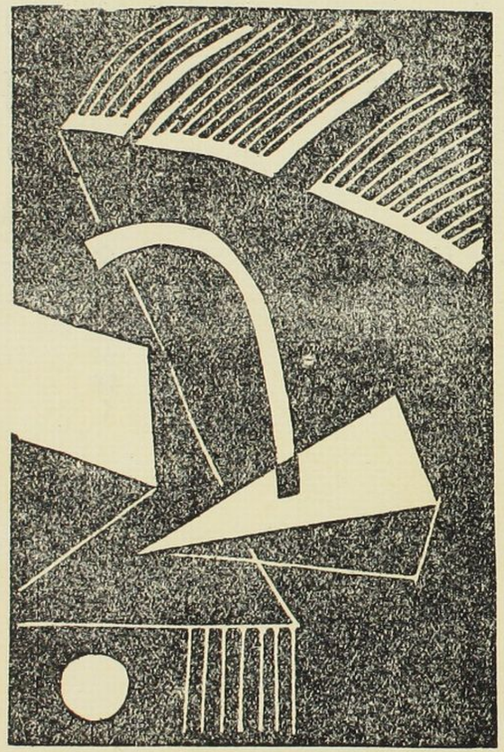
見よ赤く
にはかにわが瞳は怒りに燃え
わが歩は狂暴に道を蹴りて去れども
かの黑き影！

かの黑き影！
わが街路には
目的なく
虛無の泥濘によごれ
歩の限り
ただ歩む
よろぼい歩む
哀しき興奮のみ！



村山知義

價定の間人と鮭
50錢也



夏の日の戀

機械體操する少女のお尻と　敎會堂の屋根が輝く
聖書を讀み上げる父親
臺所で豚のやうに働いて叱られてゐる母親
しなびた大根と說敎
——禁制の建て札は
——いつか逢曳のうちに
——娘の指からはねかれた
男の腕によりかゝつた娘の胸と腹に
素的に怖ろしい　**ゴツホ**のやうな向日葵が咲く
機械體操する少女のお尻と　敎會堂の屋根が輝く
天なる神よ！

踏切り番の薔薇の花

踏切り番の薔薇の花が
役所通ひの洋服の胸の**ボタン**に
KISSされた

鋭い**ナイフ**と**ピストル**が飛び出して
自轉車が走つて來て投り出された
帽子を踏みこはしながら
夏の賞與があたり一めん飛んだ
人間が一度に二匹死んで
一匹は檻に入れられた

——汽車は一秒をまちがはずに走つて行く
▲客は新聞でそれを讀んでゐる
▲隣りの薔薇を眺めつゝ
——汽車は一秒をまちがはずに走つて行く

眞面目は乾物屋の乾魚

眞面目は乾物屋の乾魚
計量器(カンカン)にかけて賣られた

殘つたものはボロ〳〵の不滿足
賣物にならないゴミ

人並に涙をながして
金と交換できない心を
どうゆうふうにハリツケにしてやらうか

血にぬられた劍と十字架の市場
俺の眞面目は　埃りの中に
如何程でつるされるのであらう

心臓をアルコールに漬けて

心臓をアルコールに漬けて
瓶の中に入れとくと

みんな歡喜となつてしもふ
幾度も　幾度も　振つてからのぞくと

瓶一杯　つらい日の記憶となつてしもふ
杯についで飲まふとする時

眞赤な哄笑が
腹をよつて悲しい怒りになつてしもふ

臍のあたりに　涙の乾ついた重點が
自分の顔を釘づけにしてゐる

鮭と人間の價五十錢也

赤いレッテルには
北海道産の鮭と人間一匹の價
金五十錢也

——せつばつまつた蟻は
——蟻地獄にをいて悶き乍ら食はれ行く
——油のきれた機械は
——空廻りばかりしてゐる
——圓錐形の底の方に
——たう〳〵這ひ上れない屍が
——天上へ眼を向けてころがつてゐる

赤いレッテルには
北海道産の鮭と人間一匹の價
金五十錢也

レールの下の生活

京橋あたりのレールの下に
生活があつて家屋を立てゝゐると云ふのか！
たんぽゝは咲かないよ！
腕と眼のない顏と毛髮と腹部とが
コンクリートにまぜられては床をつくつてゆく
アスフアルトの街道！ゴム輪の自動車と人間が散らばつてゐる！
車輪の流産とポールの合圖！
足でさへも胴のあたりから何時のまにかもぎられ
歩つてゐるまゝて埋められるか知れたものぢやない！

パンになるのかしら。

サクランボーよ！
青葉の下で眠るアタよ！
思ひ切り回い女のストッキングの輝歩！
動物園の眞晝間！
ニキビを押す外國領事館令嬢の腕に殘る赤い歯の跡！
こんもり繁る葉影——飛び上つて吠える虎！

電車と飛行船は旅役者の貴族であるか！
麥酒は急ぐ——靴が氣に入つて鳴るので
ASAKUSAの釣はこうがる！
目ぶちを隈どつた
無數の中の一匹！
腐つた百合の花のKISS！
メガネのはまるやうな眼鏡で笑ふ眞赤な色！
燒きこげてパンになるのかしら？——
「共和國は出現するか？——
「どうでも勝手に！廣告文！」
首がもげて散る——寢巷——ギアマン！
強いけだものにむしゝ毛皮をむかれる私！

卑怯者

ねぢ切れた時計の指針は
虛無を指してゐる
俺が時間も金も凡て棄てた後
女は俺に向つて怒つた
「あなたは憶病て嘘付きてす！
腹の底の嘘を吐き出しなさい！卑怯者！」
俺は眞實だ！　俺は眞實だ！
俺は蜜蜂のやうに
周圍をとび廻るよりない

何が何やら——復讐です

赤いサクランボウの罐詰の中から
笑ひこけた
　白粉顔の道化役者が——僕だとは云はない！
驚愕宣言とピカピアの詩集をもつて
卒倒！
頓死の急速舞踏を
　めまぐるしく跳ねだした！
何が何やら——
何が何やら——
「よろしい！」「亂舞！」「狂氣！」「昏倒！」「絶息！」
　復讐です！
「よろしい！　初めッ！」

豚は一匹居ます

まつしぐらに走つてゐる
乘合自動車のやうな搖れる腰をして
女は——〰〰〰〰幸福そのまゝに仕事を投りぎ出して居睡りだ！
ブブウ！ブ！ブ！ブボウ！
　ボウ！　ボ・ウ・　ボウ——
アハハハハ……
　電信柱をぶつたほしてやれ！

自責は三行でも多すぎる

晝寢から醒めやうとおもつた蛙は
突然！　アタマから小便を掛けられた
オダブツ！オダブツ！オダブツ！

ある男に對する輕蔑

新綠の飛散する影からピストルが鳴る
赤と綠と黃と狂ほしい溶解
太陽の快樂
　驚愕の顏――――パラソル
　寢てゐる人生　　爆音
　　女の欠伸　光る眼
ア！　人間――――畜生！
　アア　アア　アウ　アウ　アウ
　　キ――――ン!!
蒼ざめた心臟がパチッと散つた
甘美な食物と重い紙幣束が犯人に盜まれた！
群集と處女に對する苦腦程激しき憎惡と怒りはない！
　青葉の影にカウモリが二匹飛んでゐた！
然り！人生の退屈は大砲の彈丸に射拔かれても痛感は無いでせう！
「ドンヨリ！腹つぺらし！」

ドテッパラ

毎日　々々　一錢五厘の東京で
ふらふら　新綠をお菓子かとても思つて
白い洋傘のやうにアッチの巷コッチの巷に
赤い舌を出して笑つてゐるナメタン！
　●●●舞踏はガイ骨！
　　赤いサケは血！
　　踊り子は性慾の香料！
　――ヤイーヤイーウヌードテッパラメ！
ナサケーナーイーヤーツーダーナーアー？！

東京通信

―大正十二年十二月―

飢えた腹の底で短氣な悲哀が旗をふつてゐる
安い酒精も與へられない洋服君
十二月末の黄色い東洋的色彩の貧弱

力ない歩行のピエローの群れの中
景氣の好いのは
救世軍士官と罹災民の女房の色目
眼鏡の角ばつた新婦人の黄色い齒と唇
接吻は危險な巡査の嗄れ聲
ぼろタクシーのはねつける泥
訴訟　姦淫　電車通路　人　馬　ラッパ

昨今　東京は滿艦飾の軍艦が
港の波に動搖してゐるやうな賑かさ

千九百二十三年

裸體のモデル女が
いつさんに駆け
出して笑つたら！

パ――ン！
短銃で！
赤い赤いキレイな
グルグルグルリ――
世界だ！

グルリ
地球が目玉の
神様の小個が
グルリに廻つてゐる！

櫻の青葉へ
ポチポチ
と落ちた！

人間は
みな阿呆にな
ればならなかつた！

革命主義を笑つて
腰をぬかした御用學者！
射たれた女は
ヤンバタ
ニスガ
アリガ
ラレテ
キル！

トンデモナイ
ジンスンキノ
キヤンバタ
ニスガ
アリガ
ラレテ
キル！

――カンヨウ
ンデンスキーは
無花果を食べながら笑つてゐるだらう！

葱と爆彈と女の足

葱と爆彈
自動車！
走る　走る　走る

田舍者の涙よ
流れろ　流れろ

臭い豚を殺せ
外國皇子の白粉くさい肉體に對して
●●●●●急速な車輪！

新婚の女の足！
射●！
A=A

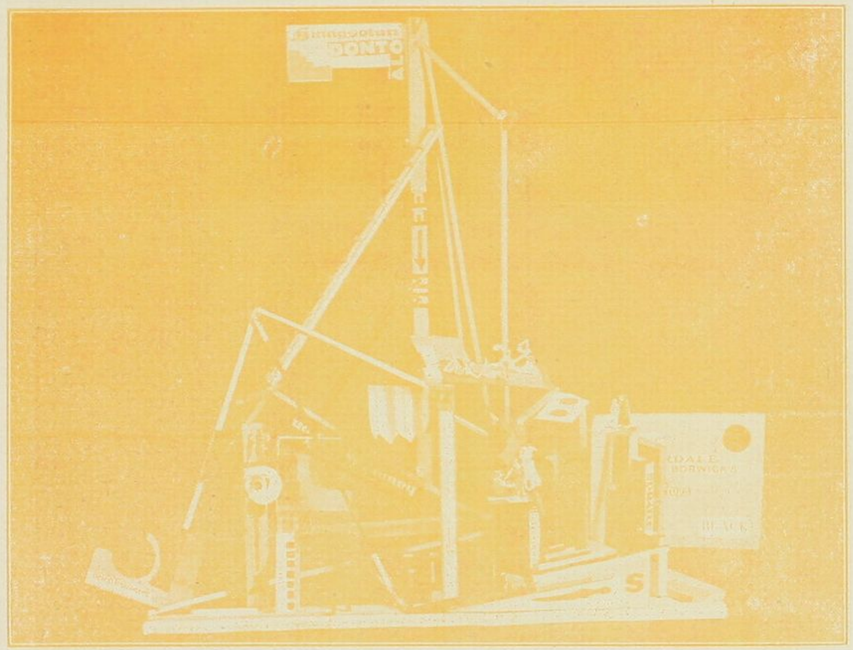
チンナを讃美する

胸部
●夢とキッスと雌蕊！

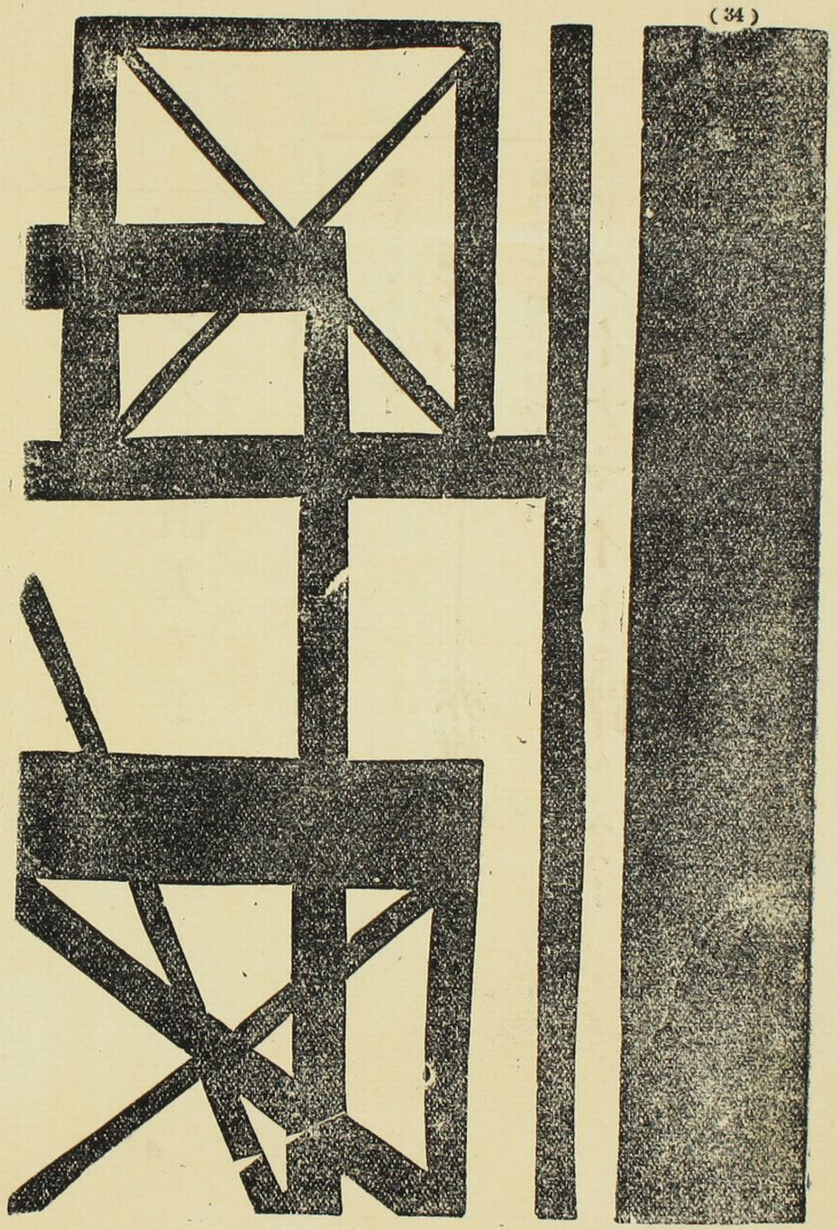
腰部
●生々しい現實の怒つた薔薇！

ダイナマイトを踏んでみろ！

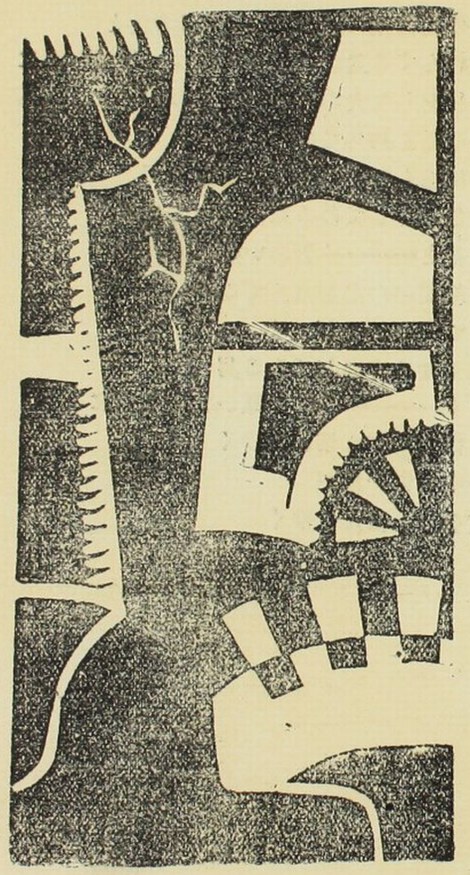
歯車●●廻る！
赤旗●●飜る！



牧　壽　雄



靜物は欠伸をする



靜物は欠伸をする

腐つたアップル●パイのやうな細君と
舊式の山高帽の愛情深い宣教師S氏と
けいれんする羞恥の赤さをもつた午後の庭に
柔い目をした犬の愛撫を見つつ
天國の話を初めてゐる
泣きはらした目のやうな山茶花が
無益な顏をしてゐる私に照つてゐる
紅い花と———蒼白い顏
空に剝製の白鳥が飛んでゐる
饐んてゆく一日を
挽歌も知らず過してゐる男
明るく———そして暗い太陽の面に
愛と歡びは燃え切れてゆく
胸の中で青い蟲が
果實をむしばんでゆく

女の唇は嘘僞に割れてゐる

生梅のやうなレストラントの女の投げ言葉は
ウヰスキーと强い粉煙草などでは消せない
私の悲しい神經を
紙のやうに燃やす

强度の燒火の下には
白い骨がくずれ殘つてゐる
微笑も憎惡も陰毛も
柔い足で蹴らうとした女優の
タンバリンの音も消えて
霜げた薔薇ばつかが傷のやうに黃赤だ
女の唇は嘘僞に割れてゐる
胸にはゼンマイのやうな手段がまかれてゐる
生梅のやうな言葉で
胸の內部をしびれさす

秋の衰弱してゐる空氣の中を
私は骨だらけの部屋へ
質草を見つけに歸つて來る

コーヒー一杯で午前は終つた

疲れた蟲が
もの悲しい花瓣の中を游いでゐる
接吻も飽いた
コーヒー一杯で午前は終つた

天氣の惡い日だ
肉體が死を思ふ
肉體のはなれゆく悲哀を
厭しつけるやうな重い憂鬱の抱擁でつづけた
女は赤いキモノをつけて笑つてゐた
古びたくつしよんの上で
ピエローは死につゝある

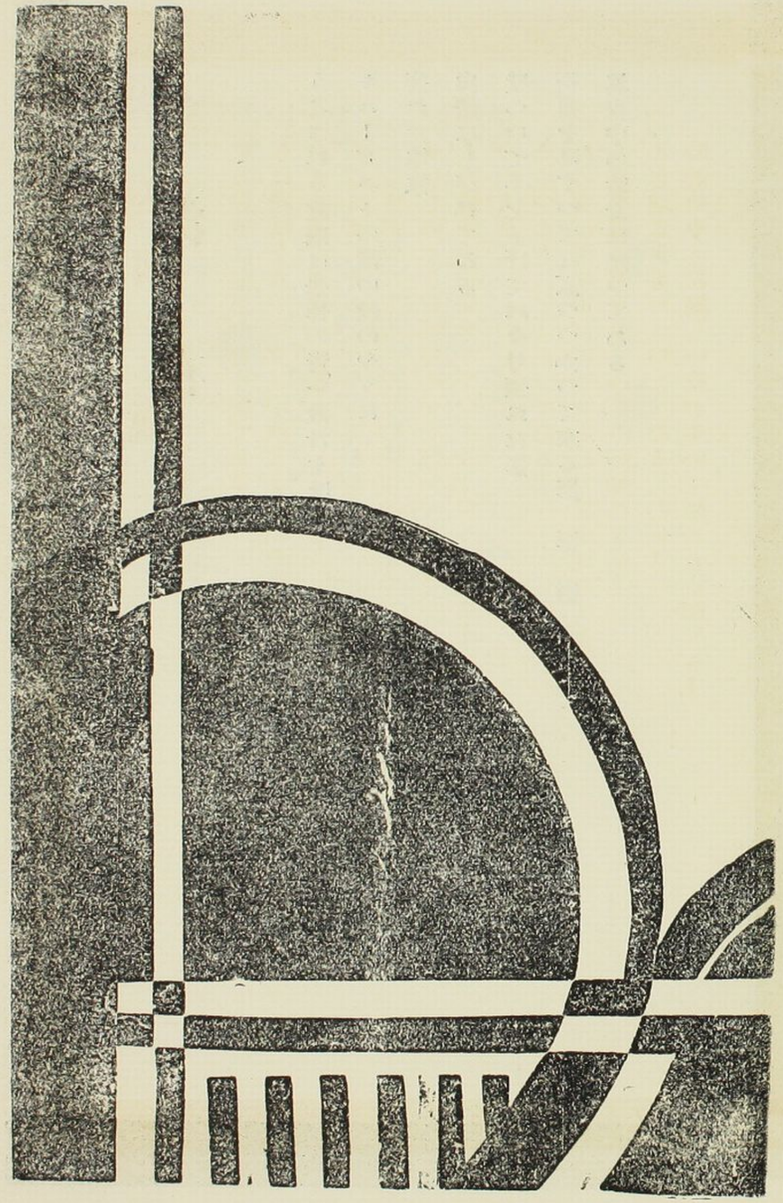
一日は終つた
黄色い電燈が部屋へやつて來た

通過する一瞬時の醉ひ

腦髓は蒼ざめた重いモーターである！
泥濘軌道へ！
約束もなく廻つてゐる！
腹の中はいつぱいに無役な工場が立つて
煙突の煙りはあらゆる內臟をまつくろにしてゐる！
やがて男は——陸上に疲れて
海へ投ずるだらう！
骨が貝殼のやうになつて上つても
屋根裏で何んの職業もなく起居してゐた男とは
誰か石灰質の骨から記憶を知るものがあらう！
晴々しい空氣を吸つてゐる想念を
通過する
通過する
一瞬の爆發の醉ひ！

幽靈

私の思想は髮毛や胃や腸てある！
私は晩飯を食つて女に小說をよんでやる！
女でも男でもない幽靈（ゴースト）が
腦膜にぼんやりとうつゝてゐる！
ぶらさがつた上着のやうに靑ざめて笑つてゐる！
せむしのやうに部屋の中を泳いてゐる！
女の臟腑や胎兒まですつかりうつゝてゐる！
赤い人形はいくつも部屋に
糸につるされてさがつてゐる！
彼の女は部屋中にポカンとした目を開けてゐる！
大きな眼は何を見てゐるのか知れない！
不思議な世界がうつゝてゐるらしい！
時計のやうに寂しい夜が歩いて來る音が聞へる！



深夜

うなされる睡眠は恐怖の青い液汁を吐く
キユービストの港の繪のやうに
疲れた惓怠
肉體はしびれてゐる
壁の中て手を上げてバタリ倒れた影
街角をめぐつてはぶつつかつて來る影　影　影
眞夜中の時計は踊つてゐる

午前

朝から黄色い心臓がキゲンを惡くしてゐる
時間を忘れた太陽が曇つて來た
泣き叫びのダンスが初まります
白紙が一枚一板心臓からめくられてゆく
いろ〳〵のものをひつぱたきたい
腹も頭も俺のものとは思へない
ダリアの花が滅茶々々にもぎられてゐる！

食事

食べたメシは穴だらけな死體であつた
メシの中には何んの營養もない
空虛の茶碗に欠伸と惓怠がつまつてゐる
みんなメシはこぼれ出してしもふ
お茶をついで箸で虛無を追ひ出す
割れさうな瀬戸の茶碗に憎惡が欝積してゐる

自らの額を割る日

ゴールデン・バットのヤニで胸が痛い
ヒステリーの犬になつて谷中の坂を上つて行く
惡酒にくらつとしてキャラキャラ笑つて行く
ぢつと俺をみつめてゐる
冷い笑ひが腹の底で生れた――――
重い劍を下げた巡査よ

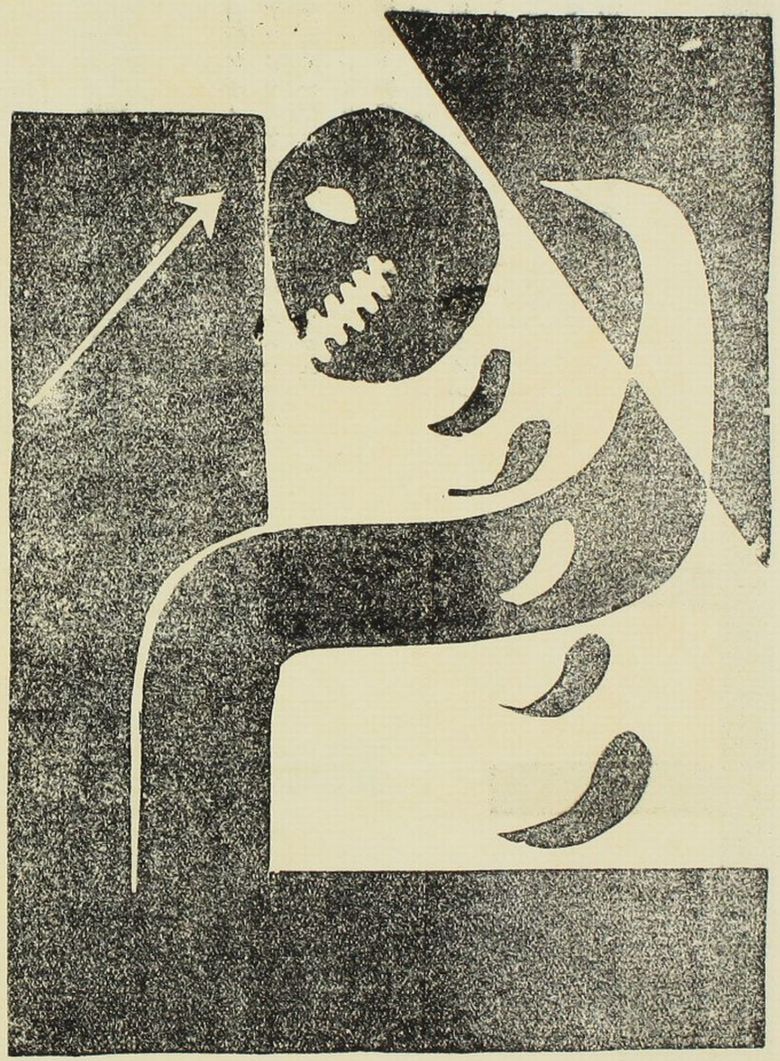
土鼠

手も足も出ない
私の心臓はもう廻らない車輪
赤い哀しい果物が
腹の中で腐(いた)んでゐる
「救けて呉れい！」
電車の救助網に土鼠(もぐら)が一匹

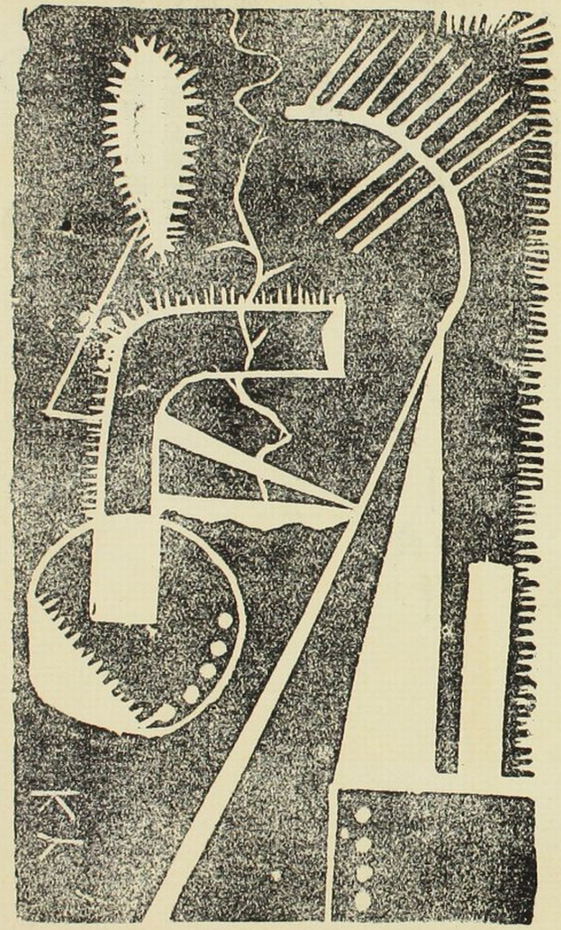
煤ケタ部屋ノ自畫像

自信ノナイ詩ノカレックシタ男ハ
アヲジロイアサノネドコデネムツナル
マンネンピットゲンコウヨウシニ
タマシイヲ犢ッテ
饑餓ト罪惡ト失意ト反抗ノ
ブラス　マイナスニ
何所ヘイッテモ賣レナイタマシイハ
うにノヤウニツカレテキル
二十五歳！
セイカツノ虚無ノ絶頂デ
カナシイ嘘ヲシテキル

柳瀬正夢



愛は悲哀の薔薇なり



○○を露出した戀人の顔——月經の日に
「便所」の中は百鬼夜中だ
強　された時のやうに
●●憂鬱な薔薇の
チーンと開き放しになつてしまつた日だ！
俺ハ春ノ日ヲ墓場カラ出テ來タ

ピストルと金貨のオモチャ
金貨　金貨　金貨　金貨!!
軌道を外れさうなアブナイ——
太陽＝錢ダッ!!!

錢だ！　みいんな錢だ！
一杯ガマロにつめこんてある錢ぢやないか！
太陽の光りだつて錢て買へる時代だ！

ゼニヲ　モツテキナイモノハ
ニンゲンデ　ナインダ

女も正義も——錢だ！
血も火も死も赤い赤い赤い
マッ赤ナ錢ナンダ！

——太陽形の錢が膏藥の代りにハリついてゐる局部から——
腐蝿した血が流れてゐる
金よ　本よ　酒よ　歌よ　女よ
——世の中は重い荷物だ　しよつて起てない荷物だ
厄介な邪魔な荷物だネ

愛は悲哀の薔薇なり

——君——　——醉つた腦漿に
——君——　——不均整な建築が
——君——　——建つてゐる

A——凍死する夜が何あんだい
B——死んだら骨が菓子になるよ
C——美しい墓場の下は遊園地だ

コノヨトオナヂサカバモアツタラ
カツプヲタタキツケアツテ
ホエヨウヨ——ホエヨウヨ——

今　オレは神聖な少女に薔薇を貫つて來た
酒場はウキスキーのやうにふるえて
怒りつぽい度怯が跳ね上つてゐる

●●●●ぴあのも●●たんばりんも●●女優も
〜〜〜〜〜〜赤い色は薔薇と心臟だけだ！
金貨も……酒も……抱擁も……暗い花だ

A「何んでもないよ女子大學生」
B「みんな彼奴等若い身空で死ぬんだとさ」
C「すつぽりマントを冠つて接吻したつて」

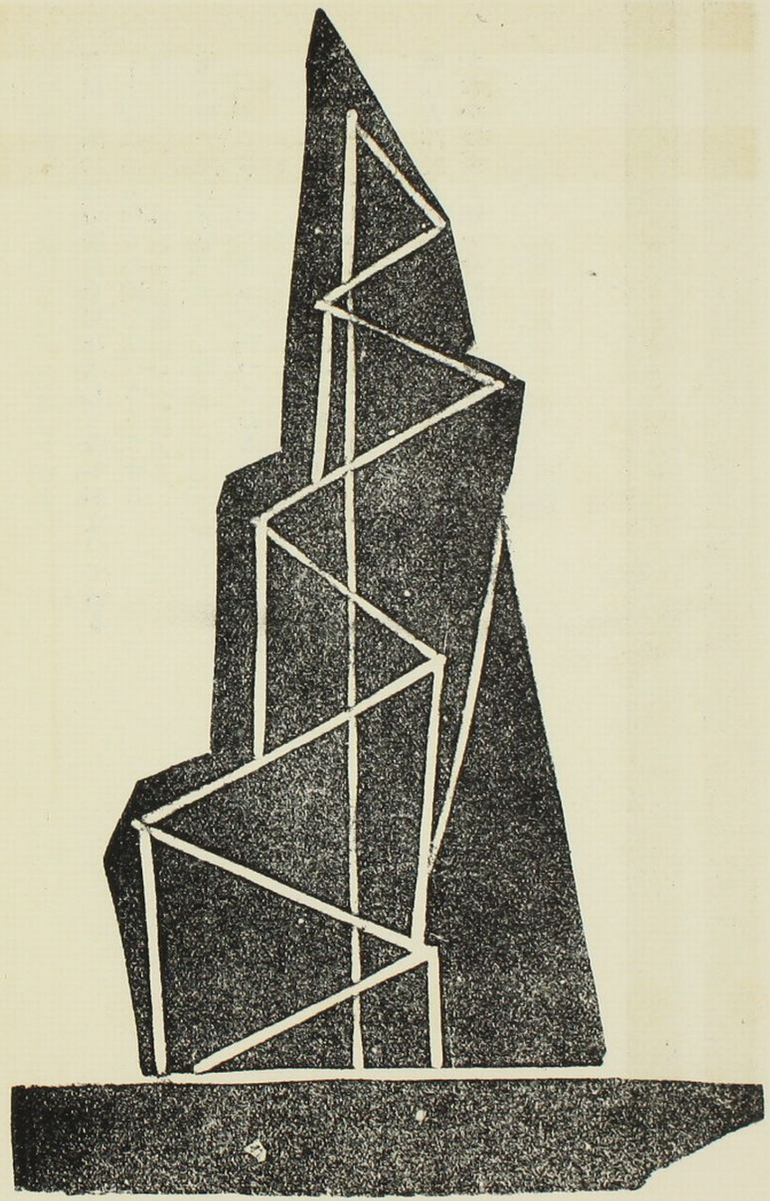
●——闇チヤ紳士ダツテ
惡魔ト一緒チヤナイカ！

屋根裏の鴨

鴨は長い獨身のサラリーマンだ！

毎夜　鴨は屋根裏から
　遠く――――黄色い心臓に向つて
　吠え　喋り　囀つてゐる
　――今夜こそ手紙の中に
　　幾らか金をつゝんで送るらしい
彼女は貧しい黄色い心臓の少女である
――鼠が壁に張つた新聞紙を破つてゐる
誰かが闇の中で怖ろしいキスをしてゐる

部屋の隅に長い獨白を思ひ出して青年が立つてゐる
――闇はあらゆる心臓をはつきりさせる
俺は楷子段の下で
「ふるさとのなまりで語つてゐる」
――今夜この家にお産があるかも知れないね
――いや　たれか死人になるかも知れないよ
鴨は古洋服をたゝんだ
かたい寝臺が細い身體をまつてゐた



縊死

赤い夕日の空に ——
巨大なビルディングが建つて
狂水病の藥瓶が碎け！
憂鬱狂の頭が割れる！
青いコーモリ傘が理性をかくして
遠くアメリカで
若い男女の奇妙な縊死が報ぜられる！
巴里では老人の長い夫婦生活に飽いた縊死が報ぜられる！
北京では少女と少女の同性愛の縊死が報ぜられる！
縊死！
俺は櫛比した商店街を自動車で走る！
狂笑する林檎 —— オンナの靴下
—— 窓の中の施れるカルタとる男の眼！
高架鐵道の車輪！
空 —— 縊死！
思ふに —— 赤い風船が墓場から飛び出す日ではないか？
死人が都會の雜鬧に見物する夜ではないか！
日本大使館にもの憂く日の丸の旗が立つてゐる日だ！

日比谷のベンチで

日比谷のベンチで
雪と愛が悲しいSの字を描いてゐる
青い魚がどこともなく泳いで
空に寒い街並みが映つてゐる
頭の中に戀人の歐文字があつた
棄てゝある蜜柑の皮は自らを嘲笑ふ赤い舌である！

カルタの札をかき廻してゐると

カルタの札をかき廻してゐると
——骨と骨の抱擁
——みぢんになつた淫賣婦の骨粉
——强いアルコールの幾滴
——血の乾からびついた金貨
——もみくちやにされた性慾が微かに匂つてゐる
——殺人と嘘僞と接吻と
——若い倶樂部の男女の骨が消えかゝつてゐる
カルタの札をかき廻してゐると
私の思ひ出の友達は今はみな死人である！

夜

醉つぱらつてしまつた
食ひ飽きてしまつた墓場だ
金を拂つて出て行つてしまつた墓場だ

胸もしぼむやうな蒼ざめた
ふるえる冷い炎が燃える墓場だ
人間の遁れざるあきらめの
骸骨が飛び出して來る墓場だ

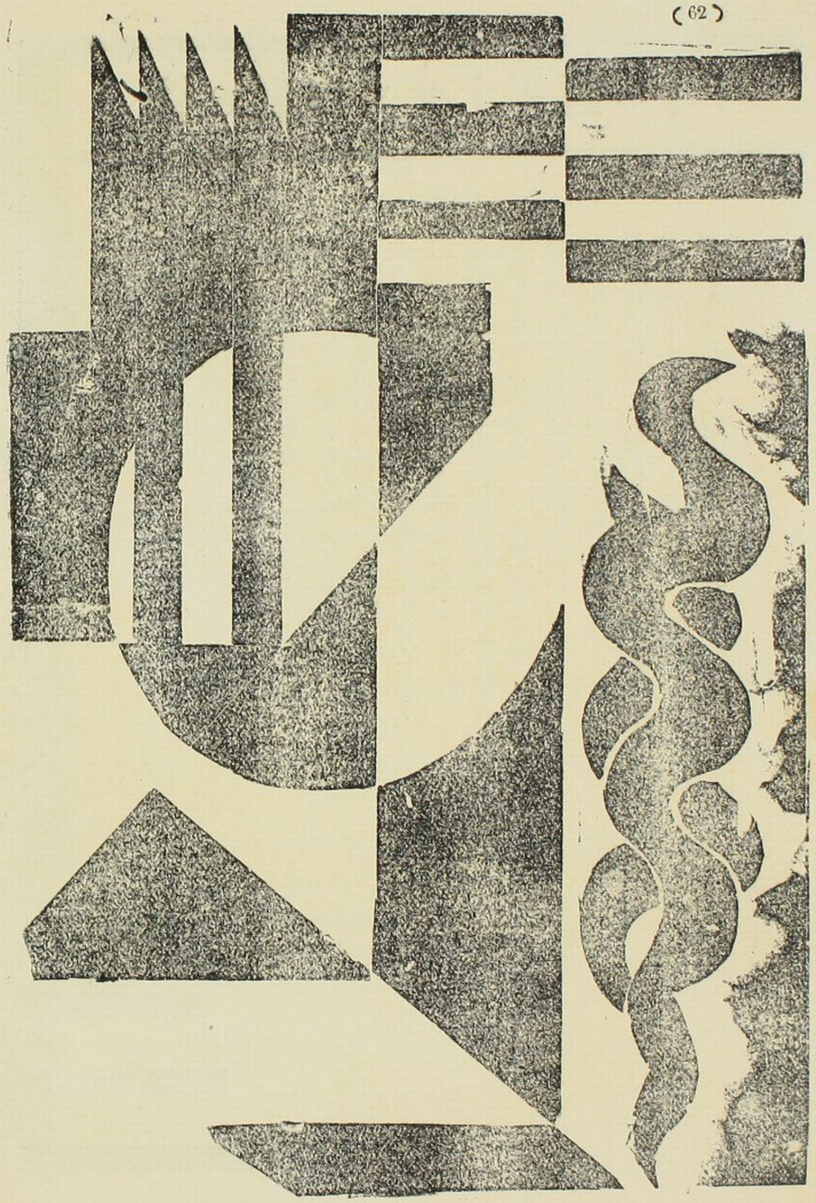
夜はただかたまりに更けて行く——
黑い空しい行列が怖ろしい樂隊と一緒に進んで行く
夜は泥の手だ　泥の頭だ
疲れて行方もない　盲目のぼんやりした泥だ

みな堪え絶えに　ひつそりと　ふらふらに
歩つて行く一列だ！
泥の手だ！　泥の頭だ！

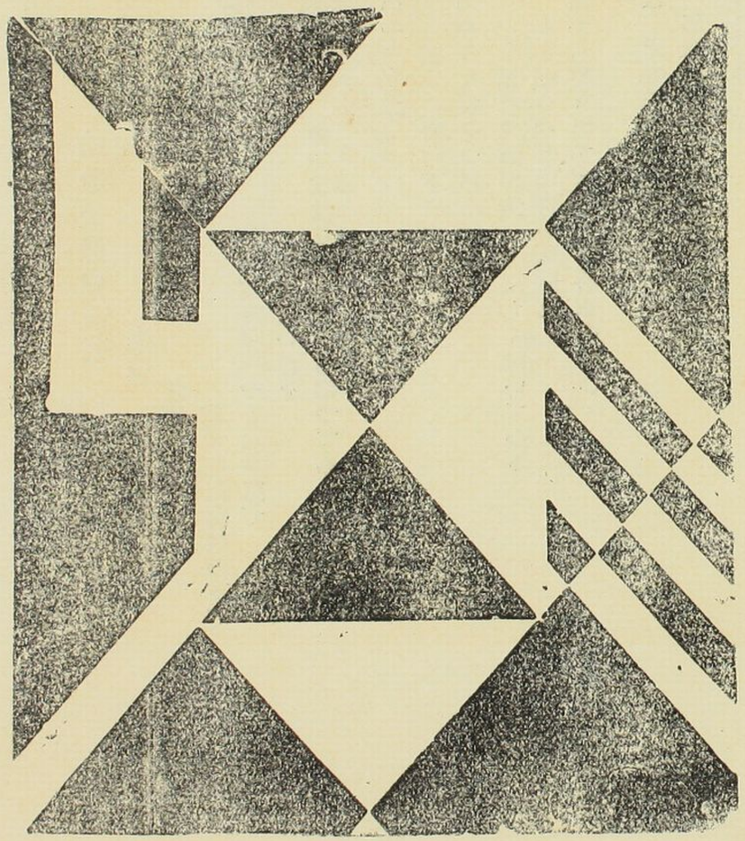
管と裂口とサナダ蟲め！

トタン張りの酒場のテーブルに
ダリアは黃色い死人の齒をむき出してゐる！
ソースのやうな濁つた血を吹きかけろ！
油によごれた食器位ひなんだ！
ぶん　ぶん　青い顏が燃え上らあ！
ビール瓶を胸の中へ投り込んでゆく——
葱と肉が焦げらあ！　心臟まで焦げらあ！
白粉の首は膿でふくらんてらあ！
鉛毒症患者！五十錢銀貨は狡猾の唇にはさまれてゐる！
腦髓の中のその怖ろしい輕蔑をどうするんだ！
さすがに動物のはしくれではあらう！
無格栫な笑みをたゝえてゐる貧弱な
兩足のつけねにある管と裂口とサナダ蟲め！
ぶるん～～～～～～～～ぶるん
世界が急速度の夜行列車になつた！

大浦周藏



男いなの首



首の男いな

煙突

●●●●●●●●煙突

屋根

屋根

黒ずんだ屋根の下で

俺は腐醉者のやうな狀態で
見えない鎖を
腰のまはりから引きち切つてゐる

獸のやうな瞳
四角の肩の下にある乳房
鹿のやうな女をつれた紳士
——腐れた肺が胸にせはしく動いてゐる
——頰つぺたの青い林擒色
兩側から噴き出す食糧品と香水の匂ひ

俺は **オモチヤ**のやうに
廻轉つてゐる外景の下積みて
ア——ア

首の男いな

●●●●●●黑煙の街巷に
今日から
？？？？？？？？
俺は 俺は 俺は 俺は 俺は

「キーサーマーハータレダ!!」
「掴首された
荒れた都會の川底に
蟹のやうに **ネムルオトコ!**」
「恐怖と——飢餓の食ひちがつた寢床て

墓場へ 墓場へ
ハイ ユカウトオモツテ
ユケナイ オトコ!」
ヅドンと 午砲が
腹部とアタマの頂點て鳴つた!
外景が凹んで
グルリと廻つた!

憶記の夜の闇

——毎夜
●●●●肺嚢は蒼黒い内出血をした
闇の中へ！
剣付鐵砲の兵士が直立してゐる
ブリキ破片の肺臓が喘いてゐる

——手を上げた
男の上を
自動車はぐつと乗り上げて走り去つた
バン！ バ——ン!!!

群集が
一度にワッと
——男をつかみ上げた！
血だらけな顔が
群集と共に
道路の上を引きづられてゆく——

題無

夢と云ふには淋しすぎる觸手ある食慾だ！
●ふくれたバンでもない！
●汗によごれたバンドでもない！
●泥まみれになつた靴でもない！
●白い女の胸部でもない！
●靴下にひそむサジズムでもない！
●頽癈でもなく火藥でもない！
忘れて忘れて忘れてしまひたい！
——それが部屋の中を三角にはぎる！
——顔を擲る！ひき裂く！血を吸ふ！
俺の無爲の心臓にはりついて來る紫色だ！
闇の夜を——地底を——燃えて氷り！
氷りついて燃える！
觸手ある夢がある！

ある男と道を歩き乍ら

八角時計が俺の顔だと云ふのか！
バットの中からすり切れたビラが出て來た！
貴樣は——
耳の腔へホースを向けろ！
腦石灰は高熱だ！
——午砲だ！
カラーを乾せ！
赤い旗だ！天氣豫報は狂つてゐる！
ギリギリ　ギリギリ
鎖と憎惡と憤怒はねぢれ合ふ！
●●●電車は胴ぶるいして登つてゆく！

俺は貴樣には——符牒でないと物が云へない！
足は義足でないと厄介だらうさ！
煙草を吸ひたまへ！
煙草が腹の中へぢりぢり火のついたまゝ落ちた！
貴樣だな——コツコツコツコツツツツ！
——言語は絶してゐるんだ！
——行動は絶してゐるんだ！
骸骨の俺等の上を歩く長靴の髯は手前だな！
俺はピストルのやうな正確な行動をもつてゐるんだぜ！
右と左——一！二！　一！二！
ダブリユウ！　ダブリユウ！
ルク　ルク　ルク
ゲツケル　ゲツケル

丸善アトナイシキ

墓場だ　墓場だ

手も足も　はなればなれだ――
身體の在り場體所がわからない――
ぶらさげた電燈に――うどんのやうな
疲勞が寄つてゐる！

借金！
仕事をするのが嫌だ！
墓場のやうな萬年床の中で
寢そべつて――何をするのも嫌だ！

賃金を貰ふのは嫌だ！
要らないものを貰ふやうに嫌だ！
借金！
　金　金　金　金　金　金　金
資本主義の金だ！

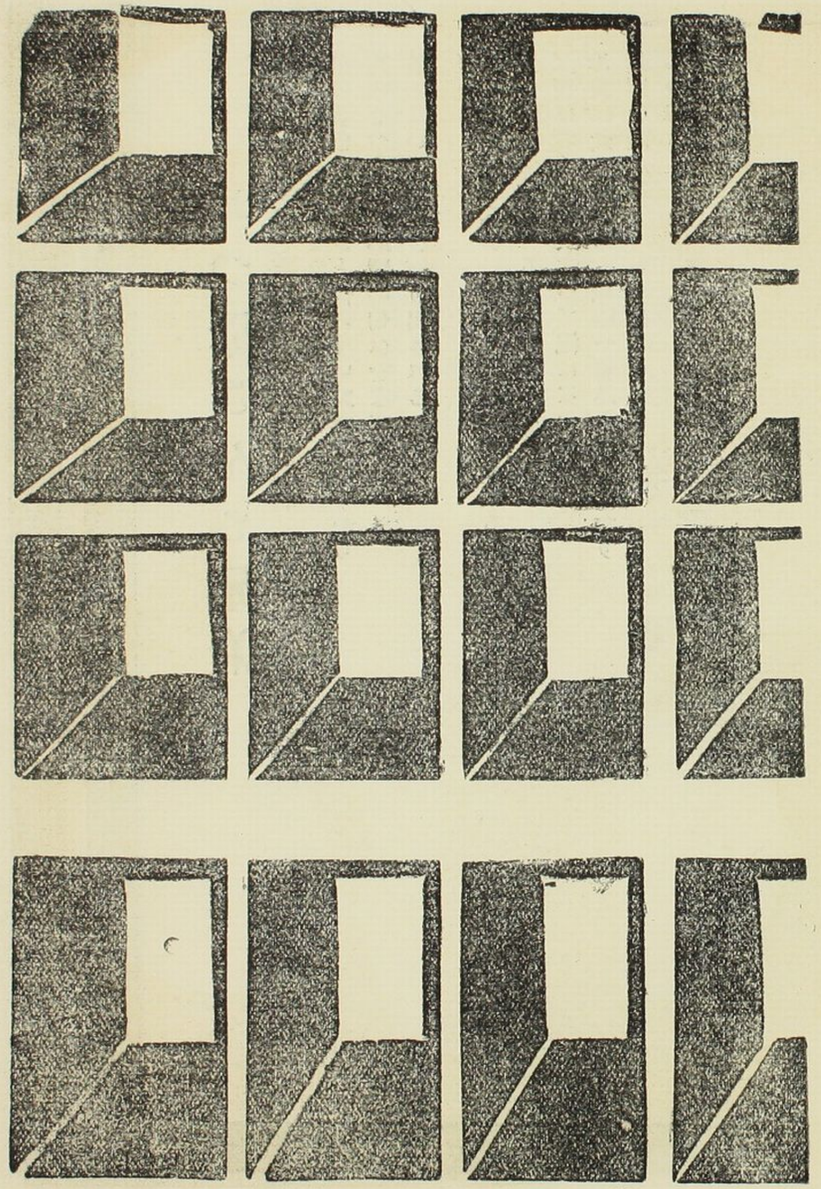
借金をふやすのが一番好い！

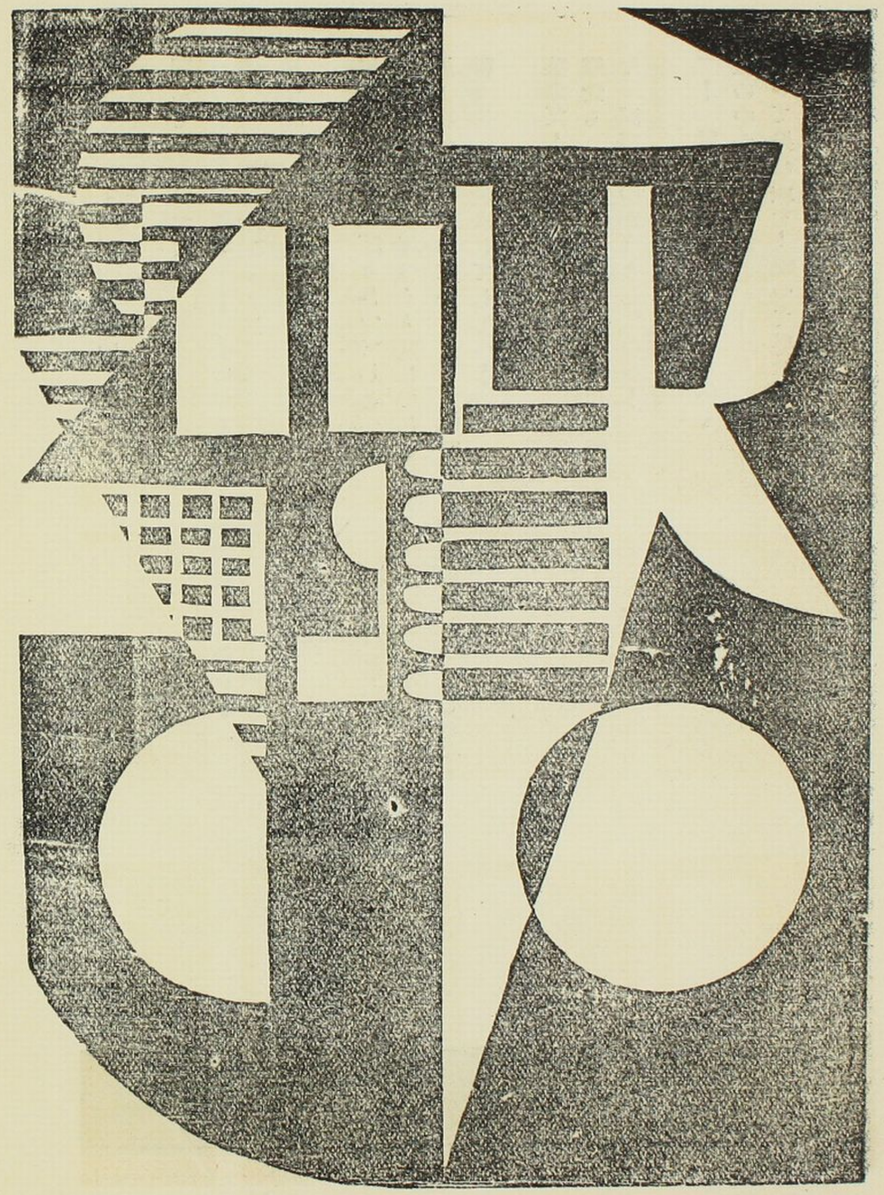
凹んでしまつた腹に
　歪んだ判斷が――いつも弱い心を虐殺してゐる！
何んでも來い！こらつ！
どうにでも　畜生！

思ふ存分涙をしぼりきつてしまへ！
思ふ存分自分を堀つくり返してしまへ！
思ふ存分甦へられない――呼吸器と生殖器をとつてしまへ！
粉々に　飛散さしてしまへ！

墓場だ！　墓場だ！
戀愛も　理想も　夢も　みんな正體をあらはして
今　滅びてゆかうとしてゐる！

ア！　誰でもいゝ　何んでもいゝ
壁の中から飛び出して！
嚙つて吳れ頭を！嚙つて吳れ！身體を！
嚙んで嚙んで！俺を嚙み殺して吳れ！





おつ母さんと兄弟

弟の黄色いズボンと僕の黒いズボンの下から
夜のまつくろい心臓の匂ひをなすりつけて
首のない金が引きづり出される

この金で飯も食ひ　切手も買ひ　洗濯代も拂ふ
何が光明で生きてるんかわからない
父親は若くて骨になつて泥になつた
母親は炊事番から　原稿や雜誌を片づけたり
新聞を讀んだり　お茶をのんだり
おつ母さん！

然し僕が右眼にナイフをさゝれてめつこて
弟は眼球が突び出す近眼で　げつそり腰から下が痩せてゐる
ズボンから出て來る金は
踏みにぢつた自分達のにごつた血潮だ
怖ろしい下痢と目迷ひが二人をそつてゐる事は
おつ母さんは何も知りやしない

不具になつてゐる兄弟が單物に着かへても
おつ母さんの眼には幽靈にもうつらない

――おつ母さん
――ご飯にしませう

長い髪によごれたリボンを結んであそぶ彼の女

長い髪によごれたリボンを結んであそんだ彼の女は
夜になると部屋にくらく座つたまゝ動かない
疲れた心臓の尖端をヂョキヂョキ鋏で切りはぢめる
――ウドンを買つて來て食べやう
――また心をはさみ切つてはいけない
昨日はアルコールにふくれた蛙が死んだよ
今日は僞瞞にみちた小さな腦髓の蛙が死んだよ

どつちもざまの惡い骸骨となつた
何もない胃をがりがり食ひ破る鼠も死んだ
――絶淵には
白いペンギン鳥が糞だらけになつて死んでゐる

飢餓は齒をくろくよごしてゐる
私は葱を嚙んで晩飯にしても寢られる
煙突のやうに無愛想につゝ立つたまゝでも平氣だ
私はすでに私のためには苦しまないが
ヂョキ　ヂョキ　ヂョキ……
そんな顏をしないで
疲勞の頂點てきり〳〵まはつてゐる心臓をねむらせろ
――ウドンを買つて來て食べやう
――夏ミカンを買つて來て食べやう

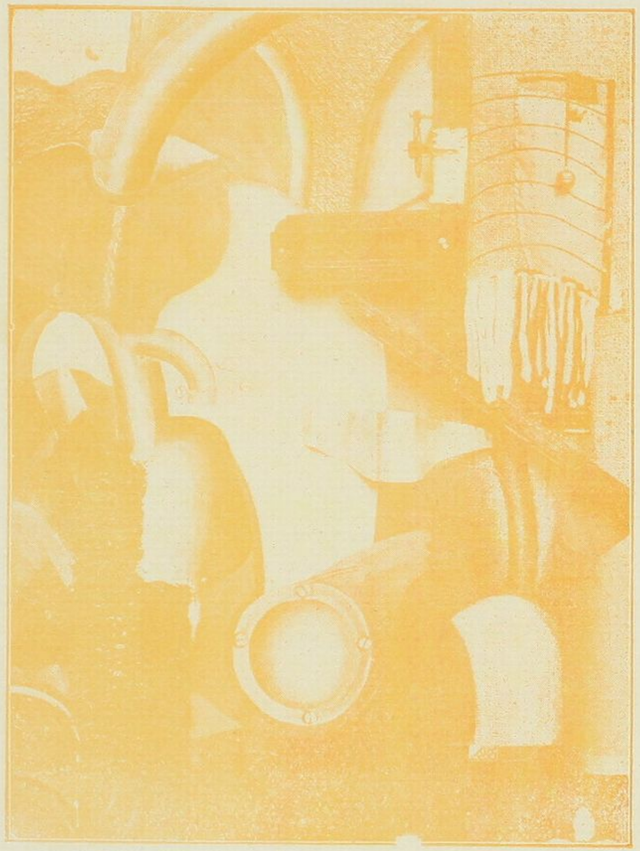
父上の苦しみ給ひし事を苦しまむ

頭蓋骨の割れ目を馬車は走つた
馬の顔には大きな眼孔がぽつかり開いてゐる
闇の中へ馬は足を上げてゐる
馬車の中には女の死體があつた
お腹には赤んぼの大きな瞳が見開かれてゐた
小さな手足はしつかり握られてゐた

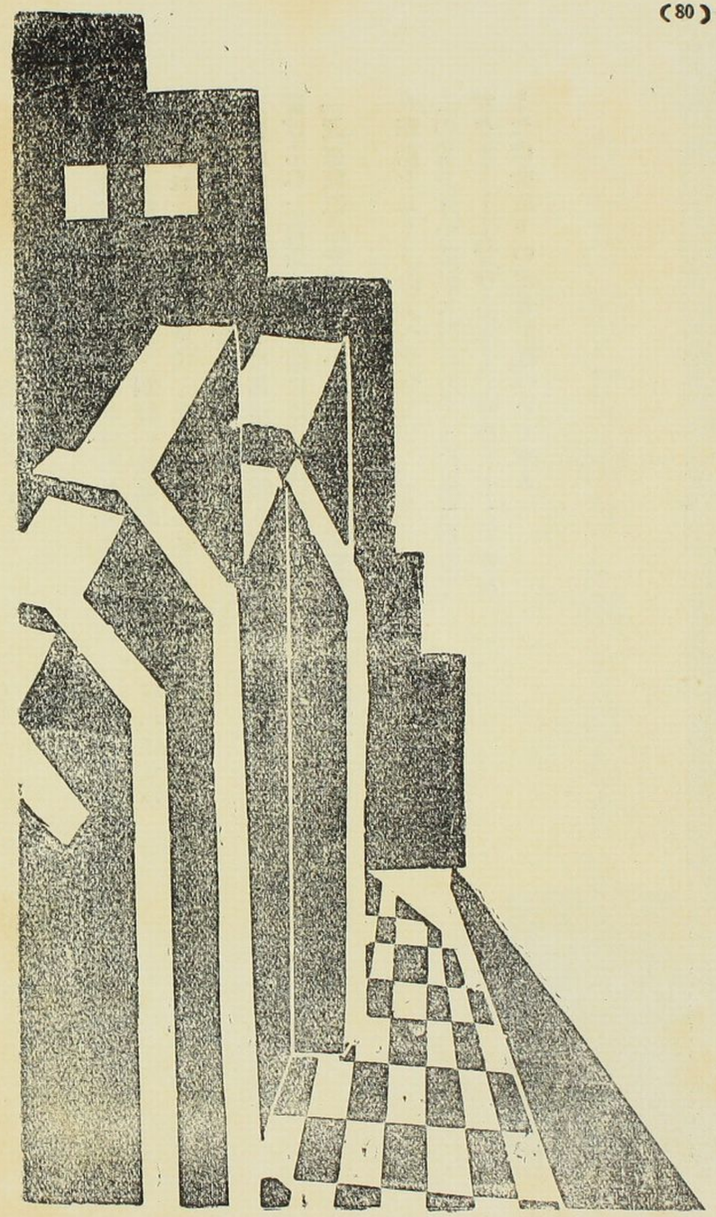
私の寢臺からは毎朝黑リボンの馬車が走り出す
私の食事からは朝毎に墓場のオルガンが鳴らされる
彼の女は父を忘れてゐる子供を生む
彼の女の蒼い顏は血管の中へ銀貨を流し込む

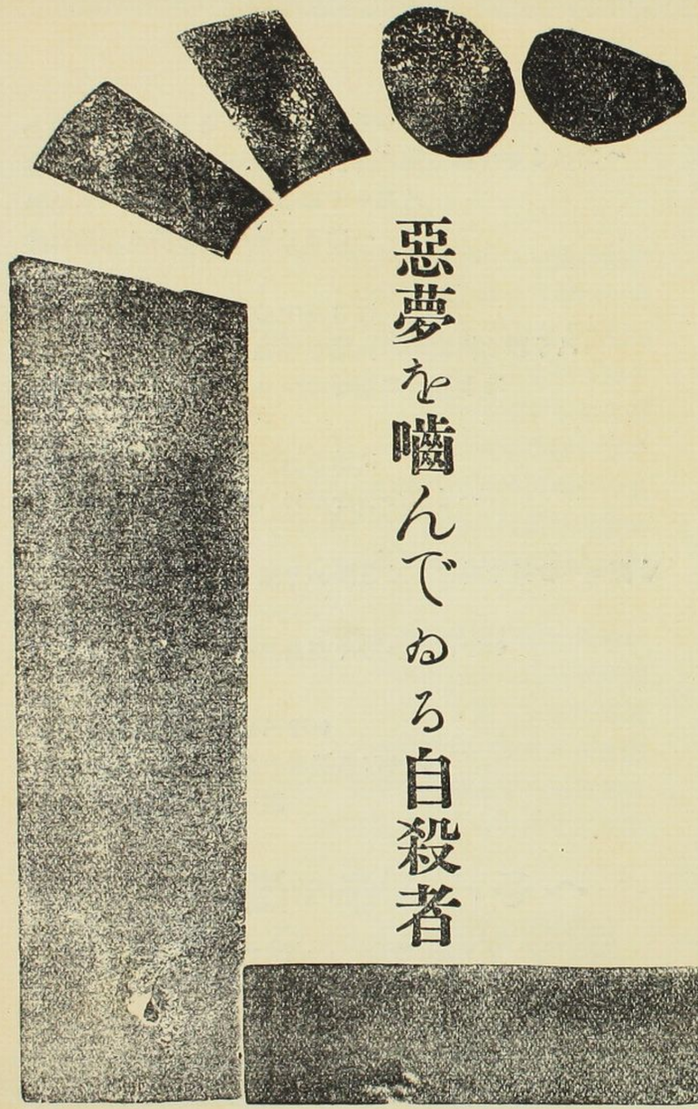
生活は飯にコロロホルムをかけてゐる
如何に月末を苦しまふと銅貨一枚鼠がくはえて來て吳れはせぬ
消費された女のお湯錢代と私の食費代を
誰に借りに行つたらいゝのか
天井がぬけて落ちさうな部屋に何物も期待するもの無く
廣げられた新聞の廣告欄には
「近來類似品や模倣品が澤山現れてをりますからお注意下さい。」

新聞紙をめくり向ふへやつて
この埃つぽい部屋に骸骨のやうに寢てゐる
ザク――ザク――ザク――ザク
また借金取りの足音が近づいて來る



「チツイウヤミスフノフイ」





惡夢を嚙んでゐる自殺者

俺は泥靴で泥の道を歩つてゆく

カツト飛び出した太陽
街中を驚奇盤的光線の舞踏場にする
驚いた馬が飛び上つてゐる

古びたシルクハツトが馬車を走らしてゐる
道路は青黑い血だ
はねくり返る車輪の後から血のついた首がはねくり返つて落ちて來る
シルクハツトの眼鏡にまで血がとびつく
鷲鳥のやうな首は勞動者の首だ

青黑い娘の顏はパチッと窓を開けて閉めた
くるくるくるくるつと三角形の眼ぶたと目玉が動いて
青い煙草の煙りがすつと流れた

俺は泥靴で泥の道を歩つて行く
あやふくシルクハツトの目をよけて
誰も誰もが歩くやうに俺は泥靴で泥の道を歩つて行く
太陽は死面(デツトマスク)のやうに笑つてゐる

惡夢を嚙んでゐる自殺者

針金にからみついた女の首！
日傘の下でシツコイ目を廻してゐる！
顏がピクピクする青葉！
軒燈がポカリ割れた！
腸を道にづつて歩く男！
眞赤な太陽に觸手がある！

無爲の瞳は黃色く流れ出す！
畜音機の圓磐は黃色い聲で歌ふ！
頭の中には赤旗をたらした高塔がある！
今朝は腸の中までねぢり上げてゐる！
キユリオシテイ！
キユリオシテイ！
煙突の煙りは無限に空をまつくろにしてゐる！
グーと胸につき出した砲身！
高塔の頂きて自殺者が惡夢を嚙んでゐる！

孤獨は夢我夢中に遁走する

赤んぼはまだ母胎の匂ひを放つてゐる
女は死體と疲勞のまざつた顏を上げてゐる
地震で割れた壁に女の心臟は血をなくしてはりついてゐる

大きな黑い扉が開いた
手と足をむき出した姙婦がうなつてゐる
硝子窓がピリピリゆれる
知らない男の瞳が
ぢつと天井の隅に見つめてさがつてゐる
扉がドダーンとしまる
看護婦が血によごれた手で馳け出した

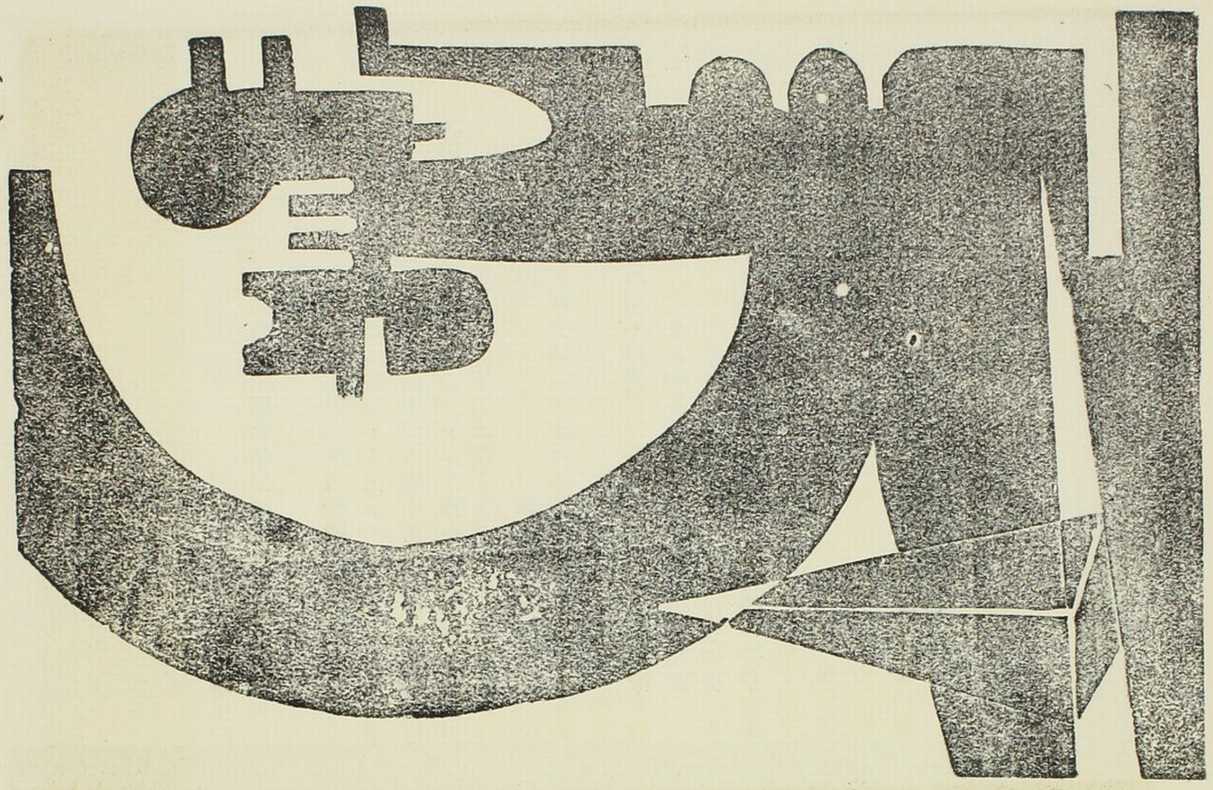
バクバクバクバクバクバクバクバクバクバクバク
赤んぼは夜の空氣を吸つてゐる
トタン屋根からドタリ摺り落ちた首
孤獨は夢我夢中に遁走する

壁の中につつ立つてゐる男

奇怪なチヤルメラを吹いて支那人がゆく
乾からびたインキで描かれた食慾
刑事室には蒼白な人像が反映する
探偵のノート・ブツクには慘劇がうつゝた

むき出された乳房に注射してゐる地下室
頭蓋骨が腐る患者
女よ！
碎かれたインキ瓶とナイフで俺の頭を引つかき廻せ
慘忍な心臟は風を切つて突進する
キリキリ　廻つてどこへ叩きつかるか知れない
ひきさかれた姦淫の旗は眞赤だ！

壁の中につゝ立つてゐる男
キ　キ　キ



歪んだ不具な醜婦

長いコンクリートの塀だ！
血と毛髪と疲勞と失明のためにどすぐろくよどんだ泥溝！
私の戀人はその中を泳ぎ廻つてゐる！
永遠も信仰も苦惱も音響も色彩も消える！
生命は一箇の原色だ！
すべて氷結して寫眞版だ！

俺は切られた戀人の片腕や心臓を嚙む！
毛髪をしやぶる！
チヤリチヤリ――――泥と汚水と骨だ！
腦髓に熱をもつた　うすつくらい煙突の草つ原で
狂人のやうな　わなゝく激怒にふるえる日！
死は無慘に醜骸を天日の下にさらす
自我のみにくい腐臭を放つて
青蠅とみゝずによつて土に歸る
空に歸る――――絶無！

けれ共　强烈な爆煙の中に歪んだ不具な醜婦は
私の胸をひきとらへる！

泥濘中の太陽を胸に燃やさない限り

檢束の翌日　胃弱の俺を
看守は犬のやうに匂ひを嗅いではなした
眞面目に悲しめなくなつたバタのやうな心を
俺は慰める事が出來ない

クル　クル　クル　クル　ルク　ルク　ルク
玩具の風車を賣つてゐる屋臺の婆さんの腸が
ブム　ブム　蚯のやうに泣いて裂けてゐる
泥濘の中の太陽を胸に燃やさない限り
彌次郎兵衛のやうに險呑の頂上にゐるばかりだ

プラタヌナの葉のやうに

電報通信紙
――――――秋は過ぎる！
戀人の髮の匂ひ！
今朝も私を抱いた！
――「自殺は罪惡よ！」
――「早く歸つてね。」
――「時計は何故遲く動くの？」
硝道で煙草のヤニが匂ふ！
電車のカーブ！
子供は葱くさい！
太陽は果物よりも匂はしい～
私はすつかり墓場を忘れてゐる！
――お孃さん！
十字架は屋根の向ふに光る！
空は音もなく無限でいゝ！
空氣は無信仰の頭を休ませる！
飽くなき休らひを欲する！
何もかも忘れてしまいたい！
私はプラタヌナの葉のやうに無言のまゝ地上であそびたい！

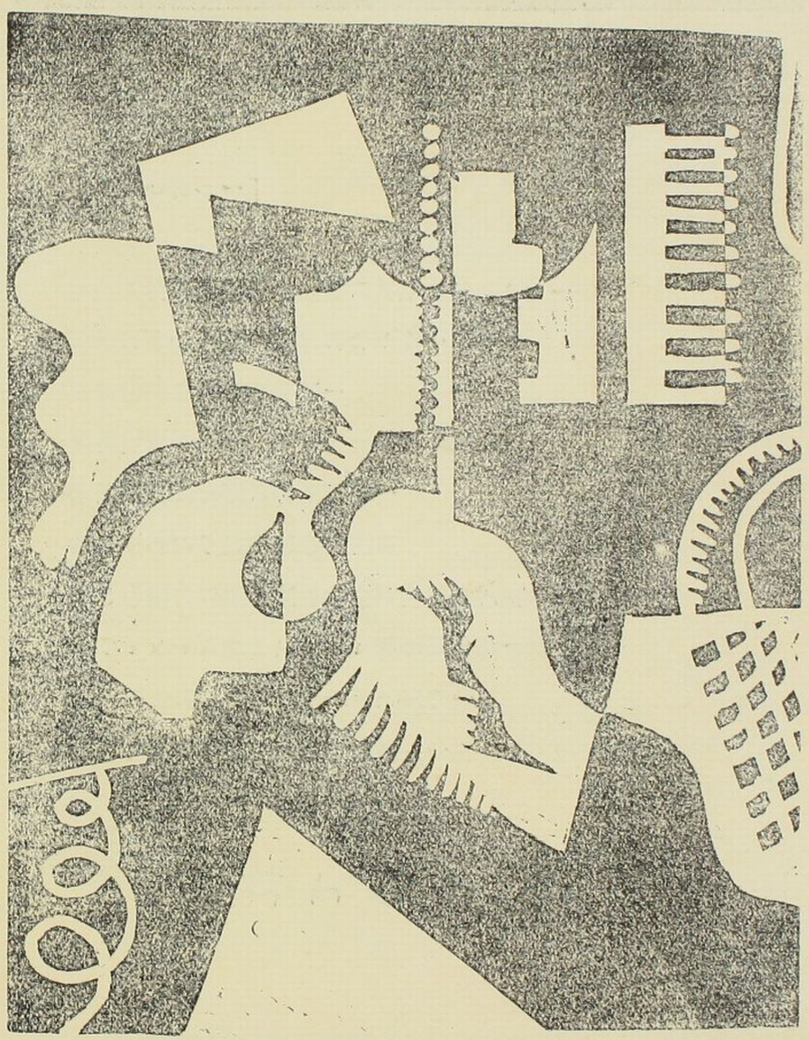
秋

昨日出獄したSは
「自畫像が煙草をふかしてゐる」
自畫像は三疊の部屋でポンプのやうに仕事をする！
笑ひは冷い！
夏の日は過ぎて行つた！
誰もみな痩せた顔が日燒けして
ナイフでけづられたやうだ！
何もかも過ぎてゆく！
海を越へた友人からは
便りがない！
忘られゆく僅かなる我等の中へ
君は歸つて來た！
飲み忘れたウヰスキーのやうに——
あゝ　秋は胸の中へ泌みてゆく！
どことなく自嘲の聲が泌みてゆく！
眞赤に咲いた秋の花のやうに——
我等の胸底は眞黄色に碎けゆく——

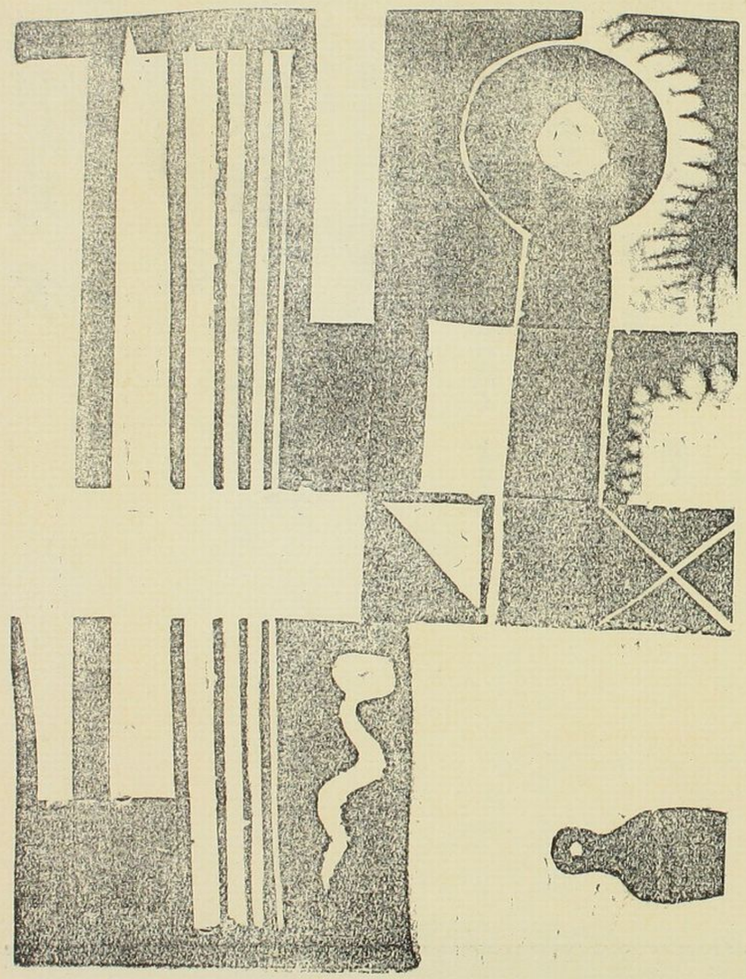
離れてゆく秋

鷗はシグナルのやうに飛び交ふ！
海底に私は濡れた火藥として沈む！
赤いマストは折れてドテッ腹を突き通してゐる！
君の心臟には黑い無爲の切手が刷つてある！
錨の上らない程の海の憂愁は
幾匹もの魚を胸に泳がせる！
寒流である——●●●
鋏で切られてゐる空だ！
握手にのみ充滿と爆發はひそむ！
すでに秋は海底から熱情に錆びをあたへる！
「さようなら！」

岡田龍夫



谷　比　日



日比谷

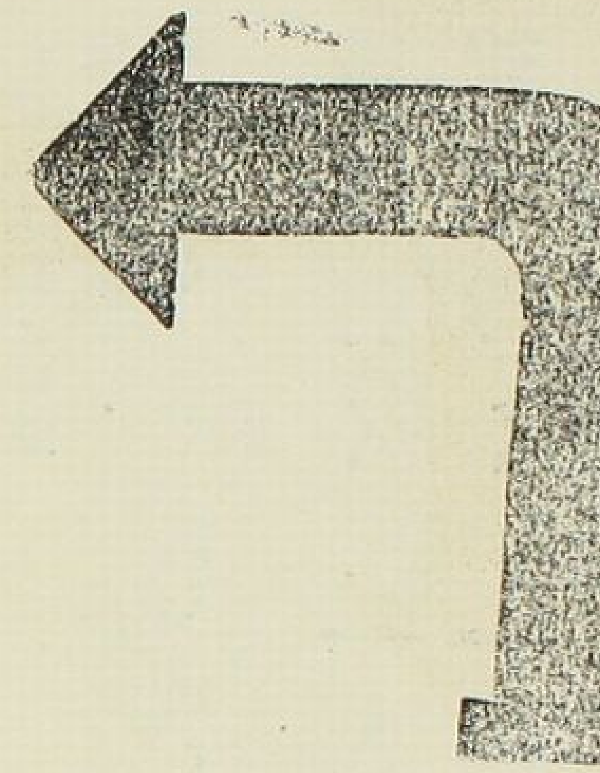
強烈な四角
鎖と鐵火と術策
軍隊と貴金と勳章と名譽
高く　高く　高く　高く　高く聳える
首都中央地点——日比谷
屈折した空間
無限の陥穽と埋沒
新しい智識使役人夫の墓地
高く　高く　高く　高く　より高く　より高く
高い建築と建築の暗間
殺戮と虐使と嚙爭
高く　高く　高く　高く　高く　高く　高く
動く　動く　動く　動く　動く　動く
日比谷

彼は行く——
彼は行く——
凡てを前方に
彼の手には彼自身の鍵
虚無な笑ひ
刺戟的な貨幣の踊り
彼は行く——
點
默々と——墓場——永劫の埋沒へ
最後の舞踏と美酒
頂點と焦點
高く　高く　高く　高く　高く　高く　高く聳える尖塔
彼は行く　一人！
彼は行く　一人！
日比谷

無題

女と若者が
廣場で
秋だ
煙火の遊戯をしてゐる

俺は饑ゑた
坂を匐ひ上つて來た
固い眼で
無神經のやうに

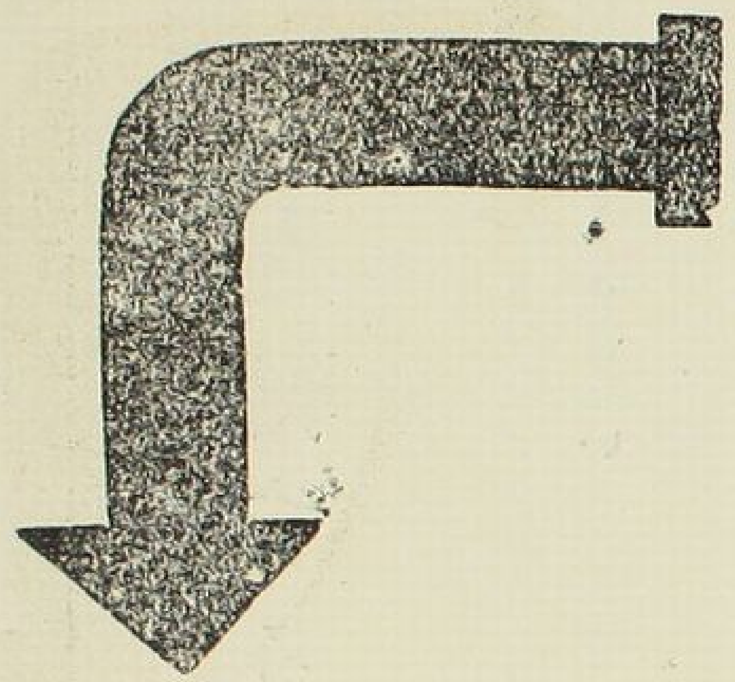


しまつた！
街角を
灰色の自動車は曲つた
罪人のやうな速さで

俺は　神經を
螺旋のやうに廻轉した
小さい眼を——もつと固く
身が前へ　こごむやうに

心臓が壓された

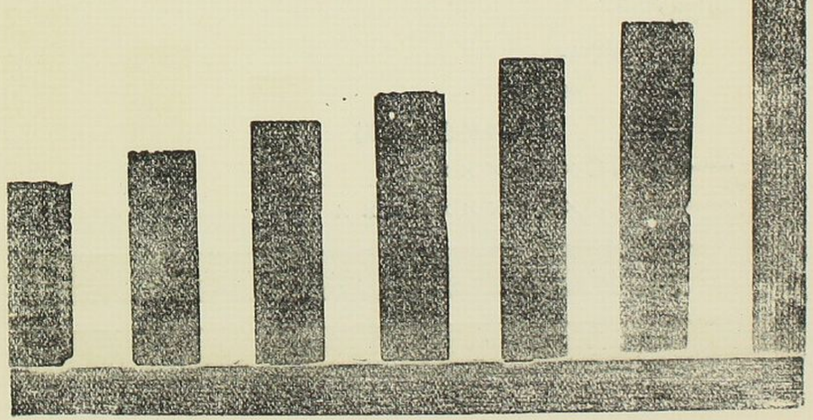
行け！　速時
第三の場所
十字街へ
——あの●●●●●●
——あの●●●●●●●
卷き起された
黄色の砂煙を追ひ



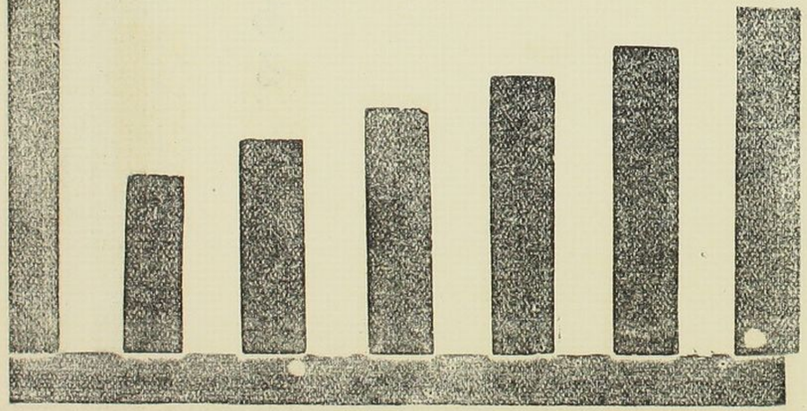
飢ゑた胃
一度に苦い憎惡
爆裂の　急激な　焦燥の
十倍に
百倍に
歩行を進ませよ
笑ひや涙の乾いた街巷を
硝煙臭い疾走
走つて
走つて
走つて
走る本能の激怒
——あの××××××
——あの××××××××××

廻轉する生命

綠黃ばみかゝつたブラタナの舗道
朝を――未だ冷い
　短帽
　　青黑い長外套
　　堅牢なる長靴
偉軀を運ぶ――――數人の輕い快達
直線
　直角
凄い目――――すばやい視線
　爽快な口笛
勇敢な黑色
　目ぶちの蒼い透明な理智
只　靜かに確然と歩く



指は太く火藥臭い
胸は强く火を持つ
　彼等は何處へ？
　何所の煙りと炎の中に？
見よ！
　聞け！
突如！
變光と暗號の交合
必死的最後の單色
激變し
　廻轉した生命
焦死――――（ピストルと死體）
　　――骨
彼等は行く靜かに
確然と



死は奴隷と主人に無關心である

恐怖の晝と夜だ
——蟋蟀と雨と　憂鬱な秋だ
怖ろしい影に追はれてゐる
眠れない飢餓はつづく秋だ

私は
血の氣のない戰慄にふるえてゐる
愛は燒きつくされた
驚愕を取り去られた後の塊りが

文字も哲學も排斥した胸に
力なく動いてゐる

雨は流れてゐる
　蟋蟀は啼きつづけてゐる
生命は赤い痣のやうに痛む
血は血を——復讐は復讐を
夜は夜を——死は死を

生は劍によつて救はれるのみだ
死は奴隷と主人に無關心である
私の發砲は
私の全目的である

自刻

無役な勞役が雄牛の動脈のやうにつづく！
革命の旗はしなびた花瓣のやうに
肋骨によぢれはりついてゐる！
餓えたる犬は私の骨をあさつてゐる！
私の蒼ざめたる握手は死よりも冷い！
私にふれるものは夜の獲物だ！
羽ばたく陰府への友だ！
黑き的だ！
私は私の冷いピストルと冷酷な意思を愛する！

沈着と無口の秋

過去は崩れ去つた！
私の目的は一つだ！
宿命の鞭を振つて
倦怠と埋沒の頂點で
咽喉を突き破つて血は流れた！

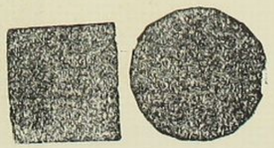
私の目的は一つだ！
怒つた意思と怒つた血だ！
沈着と無口の秋！
墓地はより靜かに永遠の無と土とを有し
私達の亡骸の横はる日をまつてゐるであらう！

地震の日に

死に誘ふものは分らない

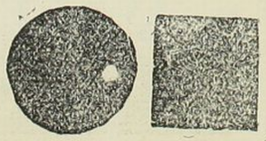
くぢけてしまつた道路の間に
首がころがつて笑つてゐる
裂かれた肉體がはなれて笑つてゐる
破裂した心臟が
ねぢれた儘　動かない

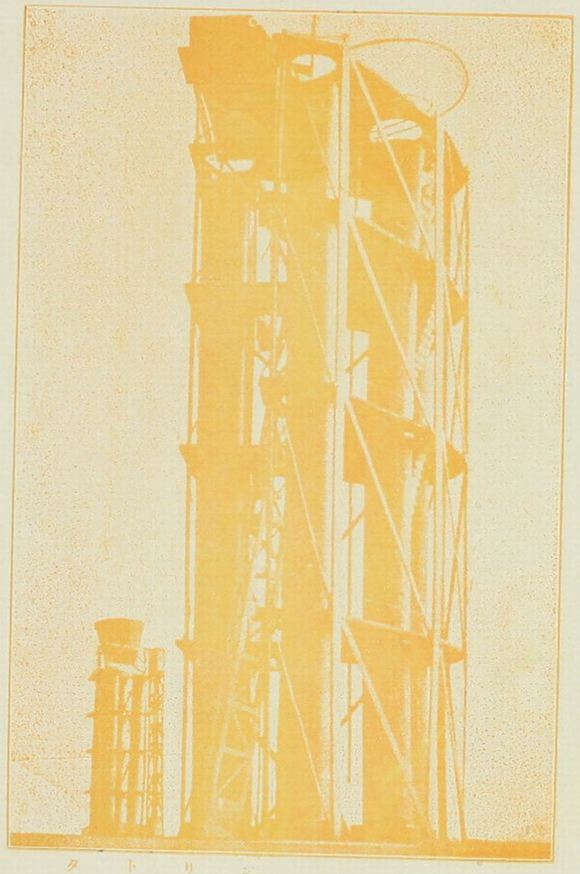
干からびた苦い血を嘗めて
友よ！
――生きて　生きて……
兩手をひろげて
その首にかぢりついて
接吻する

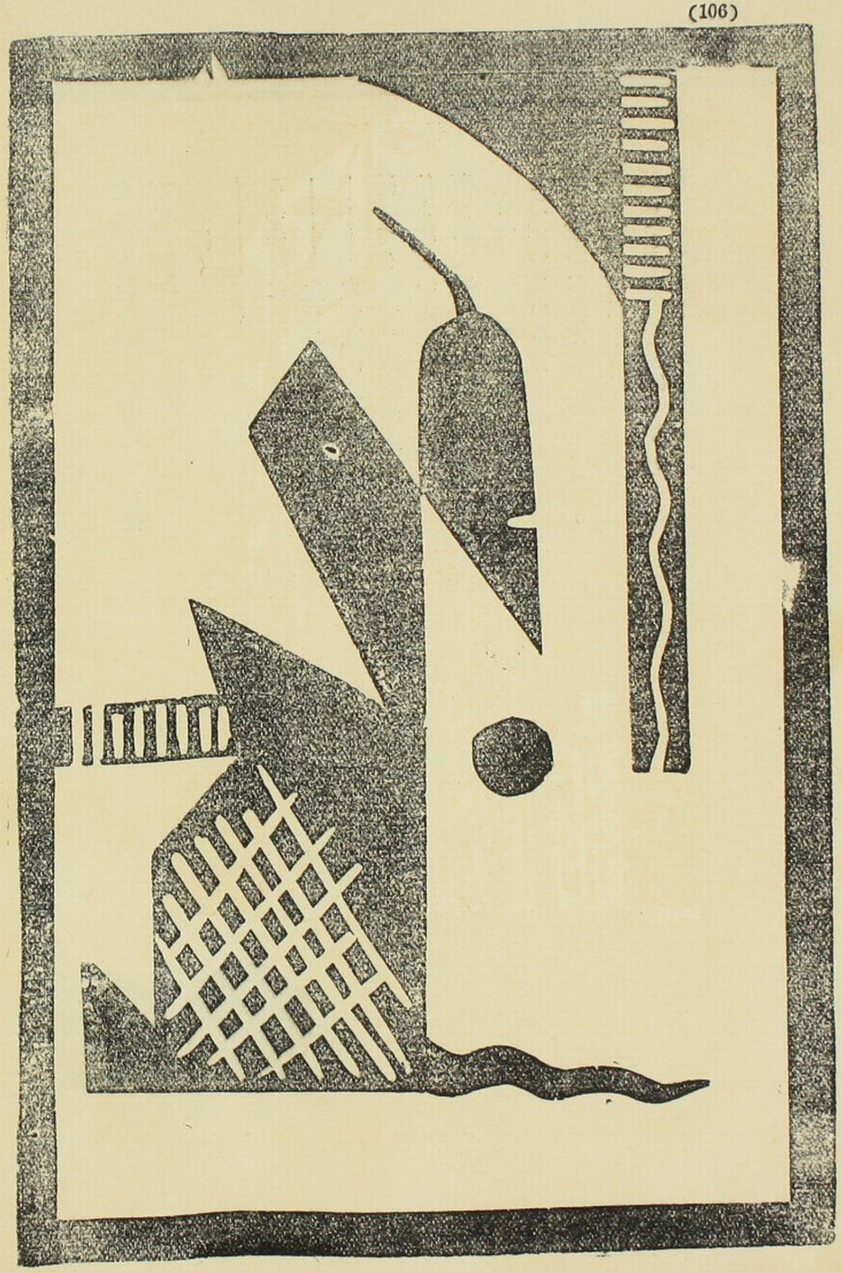


血と砂とにむせて乾きついた儘
私は
固く
――哭く
その肉體に
――血をそゝぎ
――血で洗はふ！
碎けてしまつた市街の上に
彼と我との意思は
蒼ざめて發火する

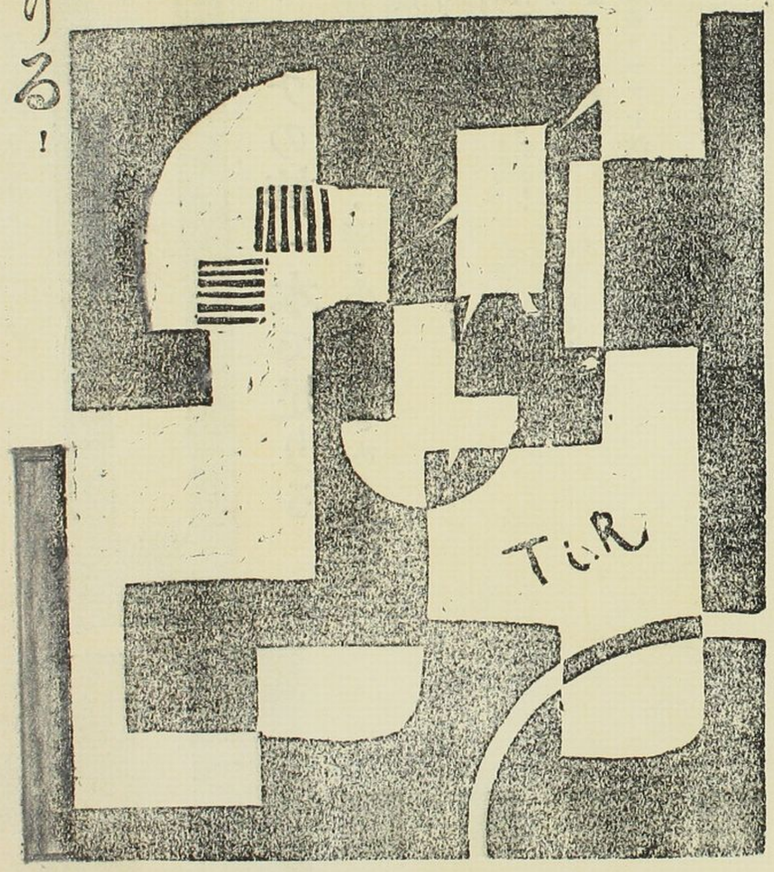
ころがつてゐる首
燒け殘つた白骨
殘つた生存は
誰にこれからを捧げやうか
干からびた血と血を嘗めて
友よ！







祈禱は
マッチの棒一本で
足りる！



祈禱はマッチの棒一本で足りる

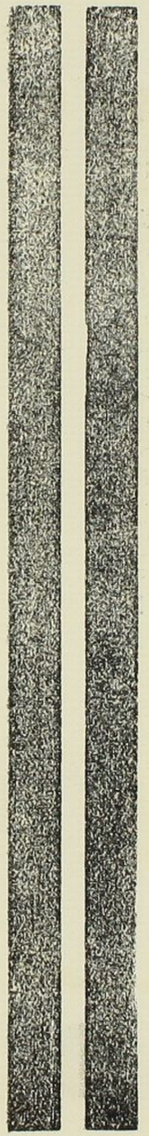
主人・妻・小供・蒼ざめる勿れ！

不眠症で不姙症の
四角なコンクリートの腕は伸びる！伸びる！
掴む――――夜
戀人の肉體は廻轉木馬である！
空中に舞つて――――ピシャンコに碎ける！
手　足　胴　首
猿●●●●●●●●ココアを飲む
螺旋階段
頂上に上るため私は女の腕を握つて進む！
フヒイーユツ！

ラン！

高利貸の眼に
さすがに　あばら骨に肉はついてゐるだらう！
疥癬かきて梅毒病みの紙幣を100000枚と借りはしない！
赤い艦尾にぶらられた彼の女の腹に子供はゐる！
青貝●●●●●●私の眼球はペスト菌だ！
網ですくい取つて消毒しろ！
鯡は泳ぐ――――錨を下して吳れ！
内部はすつかり疲れてゐる――――休みたいものだ！
脫腸！
金は支拂はれない！
レールの上に爪づいて倒れてゐる生活である！

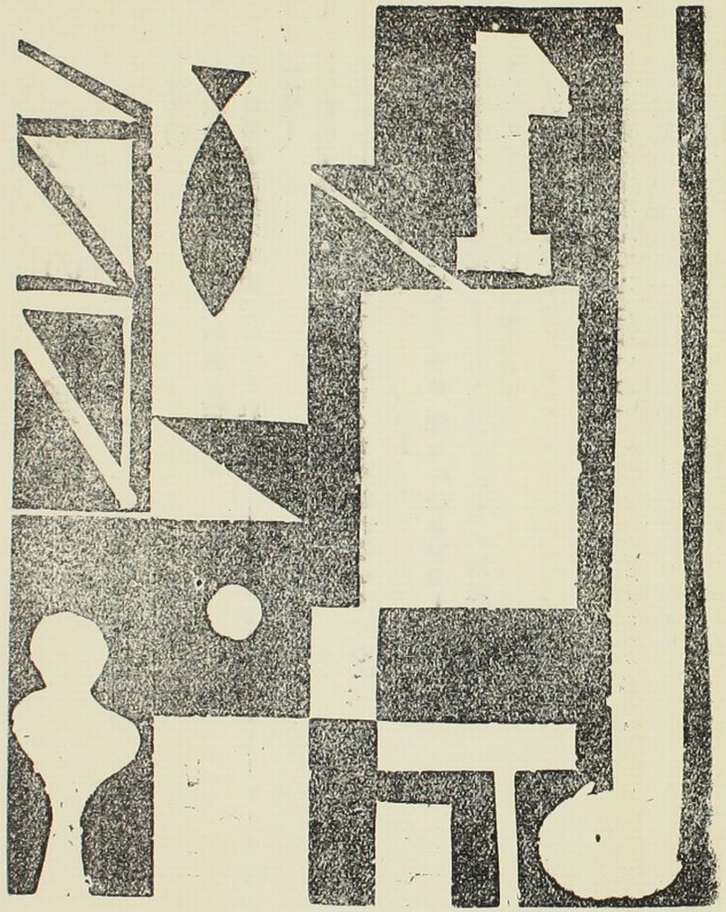
爆花！　倒壞！
花を造る！　咲かせる！　幕を下す！　掴首！
爆發！　瓦斯タンク！　彼の女は死ぬのを待つてゐた！
直線と直角と圓は彼の女を製造しはしない！
彼の女がメリケン袋になつてくれるなら
子供はまる〳〵肥え育つだらうに



木伊乃には笑みもない！
我々の腹から自動車を走り出させた奴！
ハンマーを脳天にぶち込むぞ！
待つものは明日である！
明日は餓死と絞首臺と盲目の群衆である！

孤獨と暴露と突撃に腦髓はしびれ
彼の女は眠る！
永遠の夢に！
俺の眼はねむれない！　何時までも——
俺は俺以外のものを何一つもたない！
燃えて燃えて燃えて　燃え限らない炭鑛がつづくのだ！
限りなく地底を燃えてゆく！

空は果てしなく　限りない視野だ！
——煙りは何時この美しい空を復讐て黑こげにするか？



戀愛の一音信

一秒間
虐殺のフイルムが帽子の波を直射し
●●●群集の叫號でひつきれた――――――――――――
悲鳴！
無數のアルハベツトの顏面
――「どうしたつて金が無くちや歸れないんだわ」
滿員のエレベーター
鉛管にかこまれた地下室●●「接吻とウキスキー」
地球儀のやうに廻る――――露出した男の眼球
「ナフキンで殺してよ」
「いいわ●●●早く」
「無神經家に戀愛と信仰があるのよ」
「無味乾燥なんてことないわ」
「戀愛の一音信は一億五千萬圓以上ださうてすわ」

軋音● エー　ピー

「だつてあなたひどいんてすもの」
楷子段――――【さよなら！】
「明日！」
ド●ド●ド●●●G
藥瓶●●●●日記＋＋＋＋ナイフ
髮毛　檢溫器は四十度
記號づけられた蒼い顏
ハンケチには血が吐かれてゐる！
カーテンの影に一匹の鼠は餓えて死んだ！
下水道の土管！
闇に消えた白煙！
ピピ　ピピ
プ――ム！
斷崖
――――「今朝　急行列車で戀人が歸つて來るのよ」
●●●屋根裏の一角で――――
弱い光線の朝陽
しめられたまゝの窓

空は告知板に數字を明滅させる

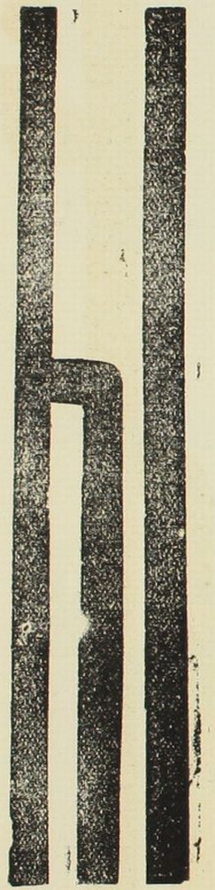
空は告知板に數字を明滅させる！
墜落する慘死するその日を！
僕●
女●
夜の空へ――――
蒼白い魚形水雷！
怒　濤！
探照燈は海波を躍らす！
沈沒！
海！
●
自殺！
～～～～～▼▼×××＜＜＜ガア●ガア●ガア
空は告知板に數字を廻轉さす！

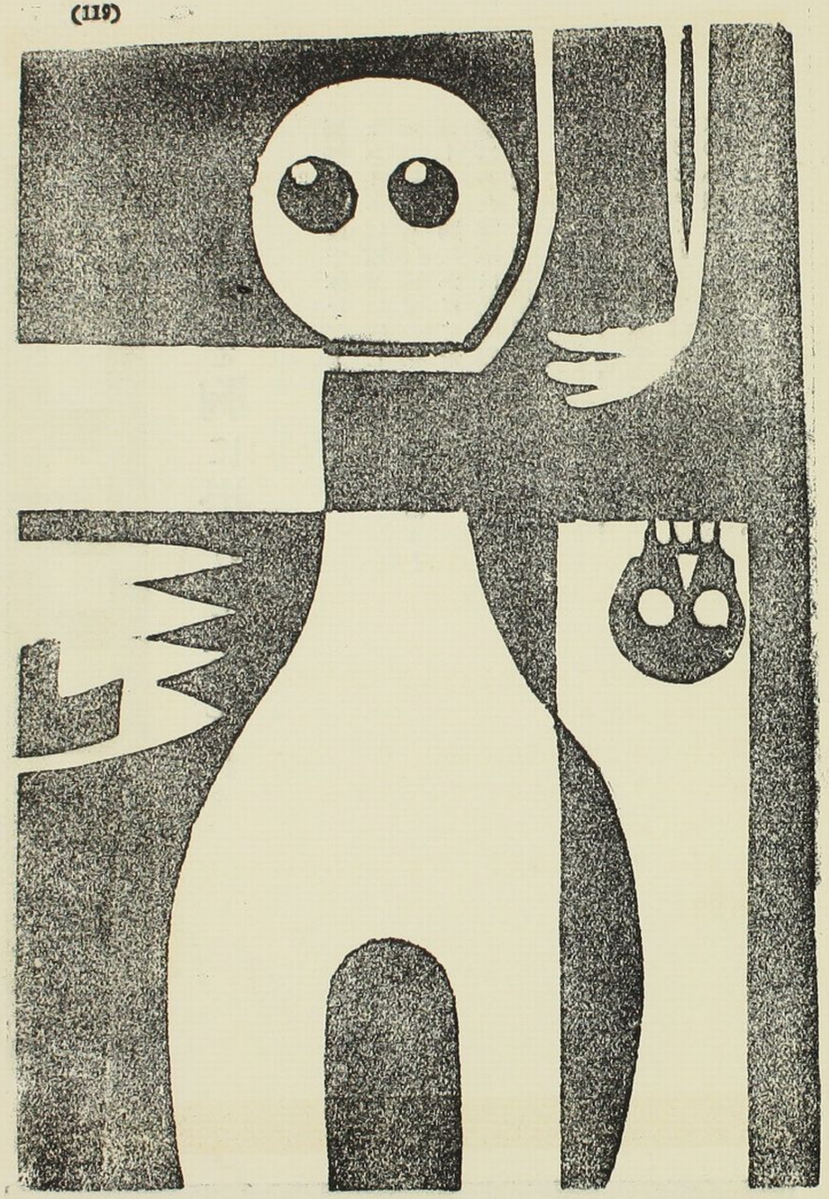
愛も嘘僞もない日！
愛も嘘僞もないと云ふ女！
手紙も接吻も言葉も形式てすむ女！
タイプライター
金錢出納器を打つ女！
三角形ても四角形てもよい顔！
女のノート　萬年筆　ルーデサック　●●　ーー
記憶●●願望
……海波に沈む！
艦！
進む！
眼球の底にーーーーーー
私は最初の數字と最後の數字を知つてゐる！
女●男ー僕
夜の空――――
白晝の街道●●●
空は告知板に――――數字を明滅させ廻轉させてゐる！

地底の鐵管から朝は手を上げる

地底の鐵管から朝は兩手を上げる！
地球だつてバクリと食へるだらう！
都會だつて固りもつれた電線腦髓さ！
石をめくるとその下に白い裸體はこつちを向いてゐる！
お嬢さん！
——セルロイドのリボンよ！
八八八義眼に掛けた金縁眼鏡！

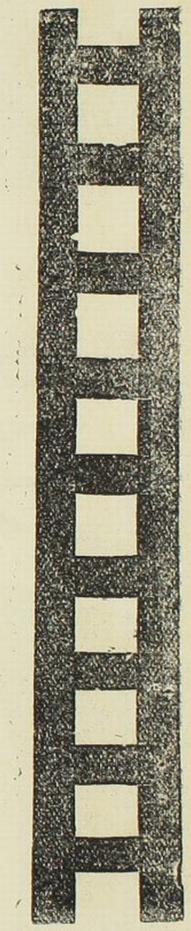
▲▲▲蒼ざめた瓦斯入りの眼球！
———私生兒のキリストは生れる！
●●●赤い病んだ病菌が部屋中をころがる！
をぎやあ！
——「藝術のレッテルよ！」
禿頭の紳士に似合ふ藝術！ヴェルアーラン！
おつ母さん！
十字架！
日記と出納帳！
馬は喘ぐ——————進む！
ロボットを計算しやう！
金錢の計算程　性慾的なものはない！
肉屋にぶらさげられたるスタンプ付きの馬肉よ！





朝・晝・夜・ロボツト

▲▲▲薔薇の花が咲いた！
〰〰〰眼球をほぢり出せ！
白衣のロボツトを產め！
═══長距離のトンネルだ！
理性は實驗室でビスケツトになりそこねた！
●
青い帽子を冠れ！
ベルトで目かくしされたロボツト
始業だ！終業だ！歩け！始業だ！終業だ！歩け！
▩
ただ幾本ものアンテナを詩の中へ張り廻せ！
ラヂオが聞える！
僕は針と糸とで身體中を縫つてゆく
黄色いメリケン袋となつてぶらさがる
まつたく最早
肉體をピストルの彈丸として射ち込みたいものだ！
射的！



ポールを胸に掛けて走れ！

腦髓の階段で休むな！
ヒュームは電波に感じてゐる！
女の唇からは薔薇の花が突き出てゐる！
ポールを胸にかけて走れ！
蒼ざめた電車は無神經だ！
ZA•ZA——RRR•KIKIKI〜〜〜〜——

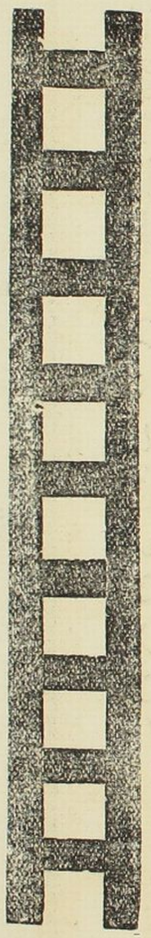
ブリキの心臓にコーヒーを飲み下す！
——散歩道は長方形だ！
ステッキは針金ではなかつたか！
女の心臓は金錢出納器ではなかつたか！
白粉は石灰とセメントではなかつたか！

ぎすつちょの女事務員ではなかつたか！
流行後れの厭生思想ではなかつたか！

ラン　ラン　ラン　ラン
發車の鐘に消える文字ではなかつたか！
エナメルをぬつた義足！
馬の眼のフイルム！
電池の中の仕掛美人！
癲狂院特製自動車の
行き過ぎた後の砂埃りではなかつたか！

ただ　胸にポールを掛けて走れ！
動物も　玩具も　人間も　豚も　サナダ蟲も　詩人も
愛も生活も　幼蟲も　スパイも　主義者も　黒パンも
南京蟲も——

すべり出せ　走り出せ　強暴に！



何百の眼球がつぶれ歪んだのだ！

何百の眼球がつぶれ歪んだのだ——
赤い流星がボールにひつかゝつて
ぶるさがつて
跳ね上つて——　泥だらけの車輪よ！
目鼻よ！
頂上で●●●廻れ！廻れ！廻れ！
もつと！もつと！
急速に！猛烈に！狂暴に！ヒステルカルに！
アセチリン瓦斯と泥だ！
その手を擧げてつゝ走れ！
トタン屋根の上では
シグナルが廻る！
プラタナスの幹には白色恐怖（ホワイトテロル）のびた一面のビラだ！
梅毒患者よ！

かさぶたを剝せ！
青つ白い霧の中に
地球に埋もれてゐる生靈を呼べ！　呼べ！
飛ぶ！
飛ぶ！
ナイフをつつこまれた胸と云ふ胸！
彼の胸を抱き起さうか！
ままよ！
——朽ちて朽ちてあれ！安らかに幸福に墓場て——死人共！
新しいかん●●●呼だ！騷擾だ！
突走する自動車よ！
切れた電線と胸部のモーターは破裂だ！
愛は薔薇の花にをいて朽ち衰えた！
ひび割れた女の胸に
子供を抱かせろ！
何回！
心臟は變色し廻轉したら！
男よ！

つつ立ち上れ！

何物も無し！進むのみ！

＝小さき行進の曲＝

ざまあつたらねえや
眼も鼻も身體中が泥だらけぢやないか！
手の先き足の先きてくる〳〵廻る泥だらけの車輪！
頭の先きにくつつけた警鈴！
やかましいベルだ！
力限り乘り廻さなきあならない！
細つこいタイヤ！破れんな！
どんなとこても乘り廻すんだ！
ハンドルだけを狂はすな！
正確に！確實に！
メートル法を忘れんな！

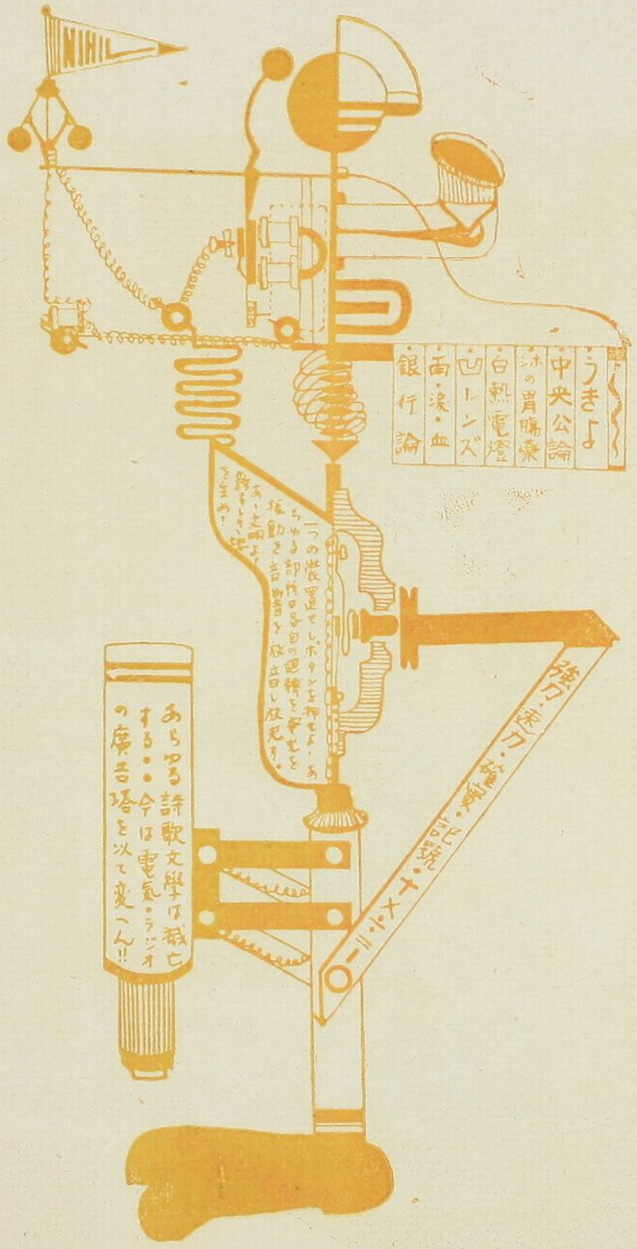
ヘツト・ライド——危い！
除け！除け！群集！
ベルだ！ベルだ！
俺のベルだ！ベル！ベル！ベルだ！
街角だ——金庫だ——重役！固い壁——高層建築
知つたことぢやない！急げ！
「混迷！」「雜鬧！」「悲鳴！」「壓死！」「强請！」「搾取！」「格鬪！」「殺人！」
●群集●群集●群集●群集●群集
自動車↓●●＋警笛＋＋ヒユールム！B！！！！QQQQQQ＝CCCCC
ドツ！ドツ！グエル！グエル！ルン！ルン！ルン！ルン！
S＋W＋C＋O＋Z＋TNXU●●ーーー／／／／／／ーーーーーー
女！女！女！女！＋男＋男！男！男！ーーー車輪ーーBB！
行進↓ザフツ！ザフツ！グツ！グツ！グエル！グエル！
フーフーフーダブ！ダブ！ダブ
メートル法を忘れんな！
正確に！確實に！
ハンドルだけを狂はすな！
ベルだ！ベルだ！俺のベルだ！
ベル！ベル！ベル！ベルだ！聞えないのか！俺のベルだ！
除きやあがれ！

人間の斷層

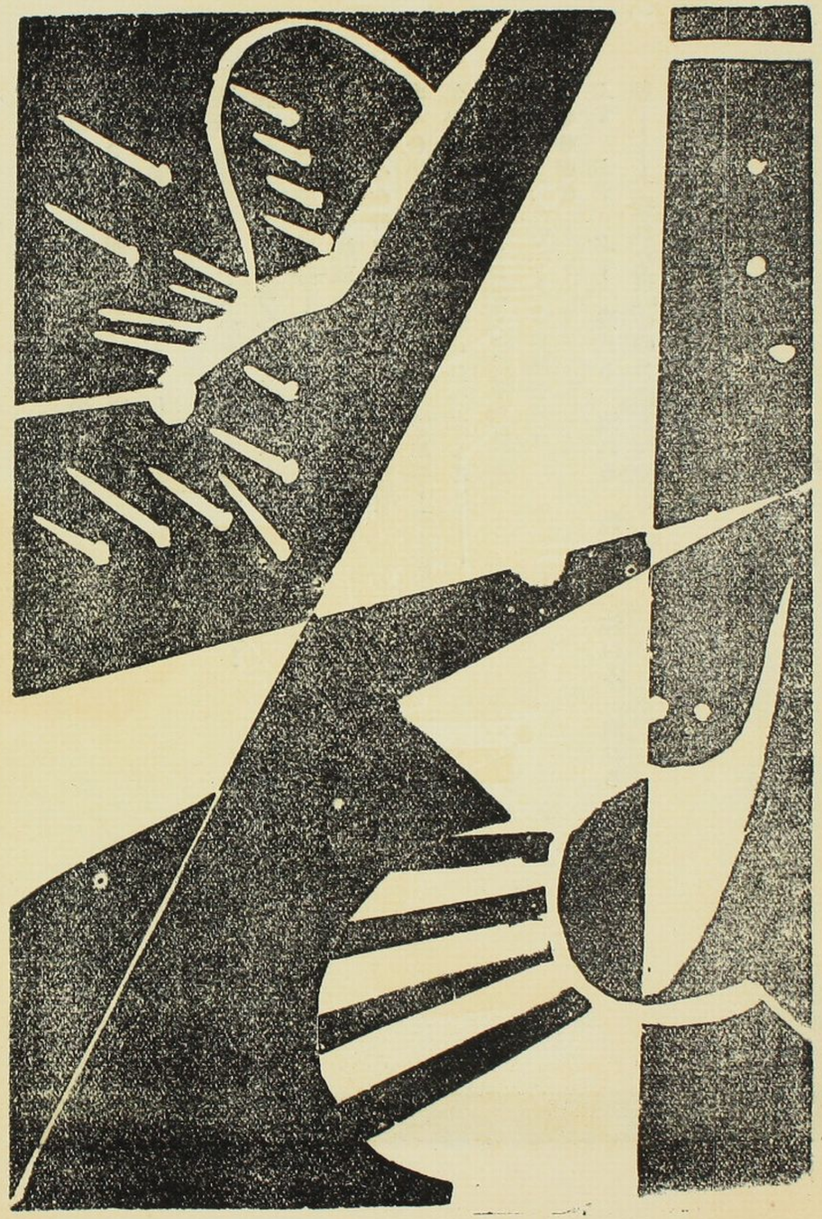
彼等は抱き合ひつゝ地下に埋まる

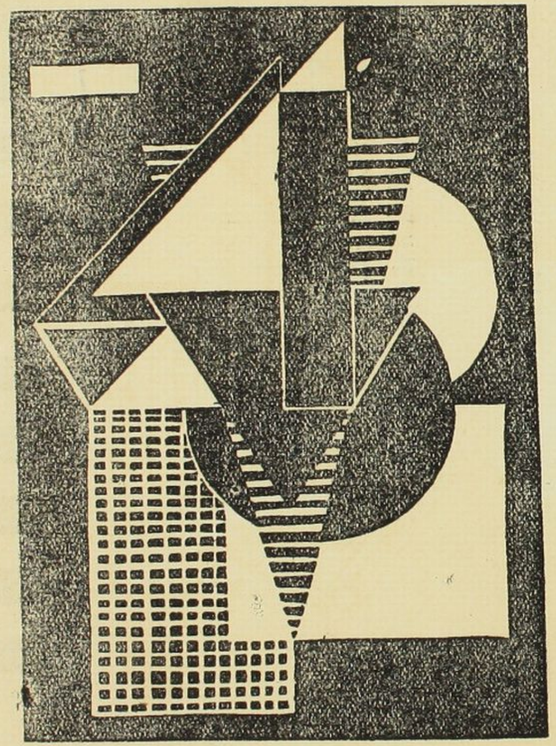
闇〜〜〜〜へへへへ
惓怠は地下に埋つてゐる骸骨だ！
堆積された鉛板と煉瓦の虐殺の底に！
瓦斯●●●
コンクリートのビルディングに壓せられた重力！
鉛管の底に——無數に動いてゐる顏！
カンテラは搖れる！
人間の斷層！
まつくら暗の泥濘にたほれた馬よ！
終電車から起き上つた男よ！
病院から出て來る腕を繃帶した職工！
高壓線！
瓦斯！
呼吸は瓦斯！

機械は止つて——工場は蒼つ白い！
針金さ——眼も唇も胸も兩足も！
肉感なんか——豚にキスした方がましだ！
誰が●●の變りに
薔薇と百合の花をもつて仕事する奴があるものか！
愛は現在を占ふトランプぢやない！
瓦斯●●鐵●疲勞——混入した腦髓！
——大きな眼球の女が落ちて來る！
クク●クク●クク●
キイ●キイ●キキ●キキ●ウブエラ！
笑ひ聲が曇り空の電線にひつかゝる——
スパークの支離滅裂だ！
××××
●●●●●
ぷす　ぷす　ぷす　洩れる　洩れる　洩れる　洩れる　洩れる
朝——「疲れた夜」のゆき過ぎた後を
一線を引いた白煙！
病人●殺人●死人●ピストル
惓怠は地面一面にもみくちやにされてゐる！


NIHIL
うきよ
中央公論
ネオの胃腸藥
白熱電燈
レンズ
面・涙・血
銀行論
一つの裝置でしボタンを押せよ。あらゆる部位を各自の運轉と拳とを振動と音響と祝福し反覆す。
あ、太陽よ、鐵ゆき、北
あらゆる詩歌文學は我ら
する……今は電氣・ラジオ
の廣告塔を以て變へん!!
ナイ・ル・ニー
ヴェ・ル・ヴェ・ル・ヴェ・ル

藤原恭次郎





ラスコーリニコフ

殺倒した群集！

闇の底に泥靴は鳴つた！

●●二階へ！

——道路は爭議團の職工の手と旗が渦まいてゐる！

扉の内部では——ピストルの發射があつた！

ドラッ！

CCCCCCCCCCC——群集の叫號！

ボギー列車は巨大な胴体をもつて中央停車場へ走つた！

●赤

●燈

不安なレール——音響！

【窓】——窓●窓●窓●窓

窓●

●窓

鉛貨よりも青つ白い空氣●●流動する空氣

戰慄する動脈

突走する血液

●斧ー

VAG WNG

●●●●●●●●●●●●●●Eiiiiii————EEii

Eiiiiii～～～～～～CEiiiii

Eii●●●●

ド●ド●ド●ド●●●

首●

RRRRRRRR

開いた手！VVVVVVV

足！●●露出された蒼黒い〈臓腑〉

——壁へ！　血液

——戸棚へ！　「天上へ跳ね上つた」靴

Eiiiiiiiiiiii VAG.WNG●●●AA！ア！ワ！

●●●断崖

楷子段

濁音の急速なる破滅！

血をふくんで蒼ざめた恐怖！

〜〜〜〜〜〜刑事課の自動車は走つた！

ア！

ア！

ア！

ウ　ワ　ハ！

剣付鐵砲の兵士

駆け出した警官

●●ベルの音響

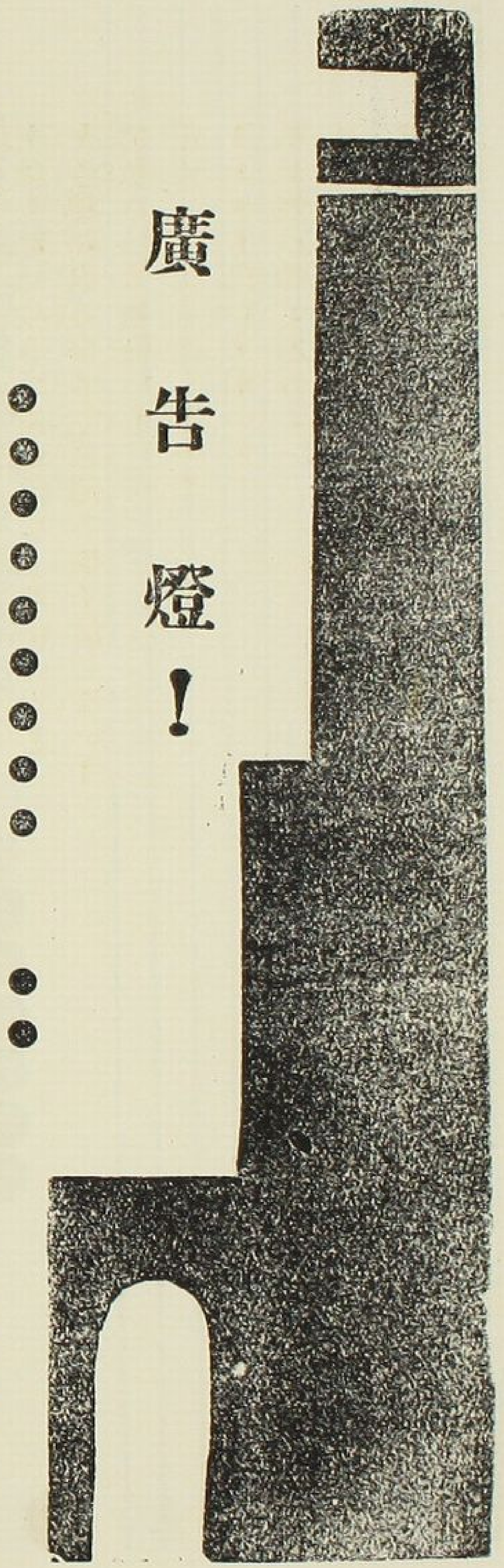
崩れる群集——自動車、自動車、自動車

十字街の時計は

〜〜〜〜〜〜赤い指針で一時二十七分！

BWO　BVVDC

群集●群集●群集●群集……群集●●●●●●



廣告燈！

排泄する○咆吼脱大反群無烟●●無無—衝突する
交流する○哮吟走量逆集數轉左上限限—噴出する
爆發する○す！すのよ動右下にに—崩壊する
突擊する○るる生！亂動動生滅—號叫する
出入する○恐産すれび—轉覆する
怖るるる

懶げな頭腦は歌を歌ふ
私は水の騷音を聞いてゐる

何物も光りなき闇黑と絶滯の海だ！
終りもなく始めもない！
あらゆるものは來て去る！
生活？誰が知るものか！木馬の面よ！
ピエローよ！
信ずるものは自由でも神でも人間でもない！
極度の龜裂をダダイストに認めるのみだ！
意味を見出すのか！見出したまへ！
すべては虚飾の羅列である！
私は退屈の連續に飽いた！
憂欝な福音は海底に白骨をさらす！
何故！私は生きてゐねばならないのか！
今や地に返る事も空に歸る事も信じない！
情熱さへも物憂い！
個性も生長も欲しない！
キネマも色彩も暗い！
私は無目的である！
悲哀も歡喜も感情は化石する！
私は一片の木版であり置物である！
私はただがらがらと鳴る！

喧騒する安慰者てある！
私は何故生きてゐねばならないのか！
私は死者てある！
私は動くものてある！
私に觸れるものは死てある！

彼は泣く！　彼女は神に感謝！
彼は笑ふ！　彼女は骸となる！
彼は歩く！　彼女は棘の道だ！
彼は喜ぶ！　彼女は疲れ衰ふ！
彼は寢る！　彼女は秘密にす！
彼は食ふ！　彼女は甘美な酒！
彼は怒る！　彼女は死の闇黑！
彼は走る！　彼女は華奢てす！
彼は沈む！　彼女は夫が無い！
彼は産む！　彼女は血を滴す！
彼は富む！　彼女は罪を犯す！
彼は盜む！　彼女は抱擁する！
彼は來る！　彼女は確く信ず！

彼は馬車を驅る！　彼は面會を拒む！
彼は冷〳〵灰色だ！　彼は女を縛る！
彼は世界人てす！　彼は膨んて歩く！
彼は間諜をする！　彼は愉快に嘲る！
彼は切符を持つ！　彼は立つ！
彼は藥袋を吸ふ！　彼は墜ちる！
彼は博奕者てす！　彼は墜ちる！
彼は走る！　彼は墜ちる！
彼は沈む！　彼は墜ちる！
彼は産む！　彼は墜ちる！
彼は富む！　彼は墜ちる！
彼は盜む！　彼は墜ちる！
彼は來る！　彼は墜ちる！

彼は行く！　彼女は裸てある！
彼る破る！　彼女は豫感する！
彼は凹む！　彼女は髯を搖る！
彼は乘る！　彼女は胸を震す！
彼は攀る！　彼女は肩を落す！
彼は洩る！　彼女は裏まれる！
彼は沒る！　彼女は大な奇蹟！
彼は埋る！　彼女は滑りゆく！
彼は轡く！　彼女は顔を叩く！
彼は抱く！　彼女は目が痛む！
彼は受る！　彼女は黑い足だ！
彼は傷く！　彼女は塵埃なり！
彼は鳴る！　彼女は遠き薔薇！

連續する——斷續する——明滅する——發火する

變節漢よ！
巨大なるローラーよ！
サーチライト！

彼は青定てある！
彼は否定てある！
彼は斷言てある！
彼は要求てある！
彼は顧望てある！
彼は實際家てす！
彼は愚劣を笑ふ！
彼は積み上げた！
彼は身元は破裂！
彼は暗殺者てす！
彼は一斉射撃だ！
彼は委せた懷だ！
彼は嬉戲にする！

彼は獨斷にする——彼は獨斷にする——彼は獨斷にする——彼は獨斷にする——

俺は道路で街上で屋上で部屋で物置きでカフェーで廣場で——●

——俺は豚のやうに生きる！

——俺はスパイのやうに生きる！

——俺は密告者のやうに生きる！

——俺は屠殺者のやうに生きる！

——俺は帝王者のやうに生きる！

——俺は蒼ざめた陰惨な實彈の破裂を聞いてゐる！

——俺自身以外の生活の廻轉と裝飾を眺めてゐる！

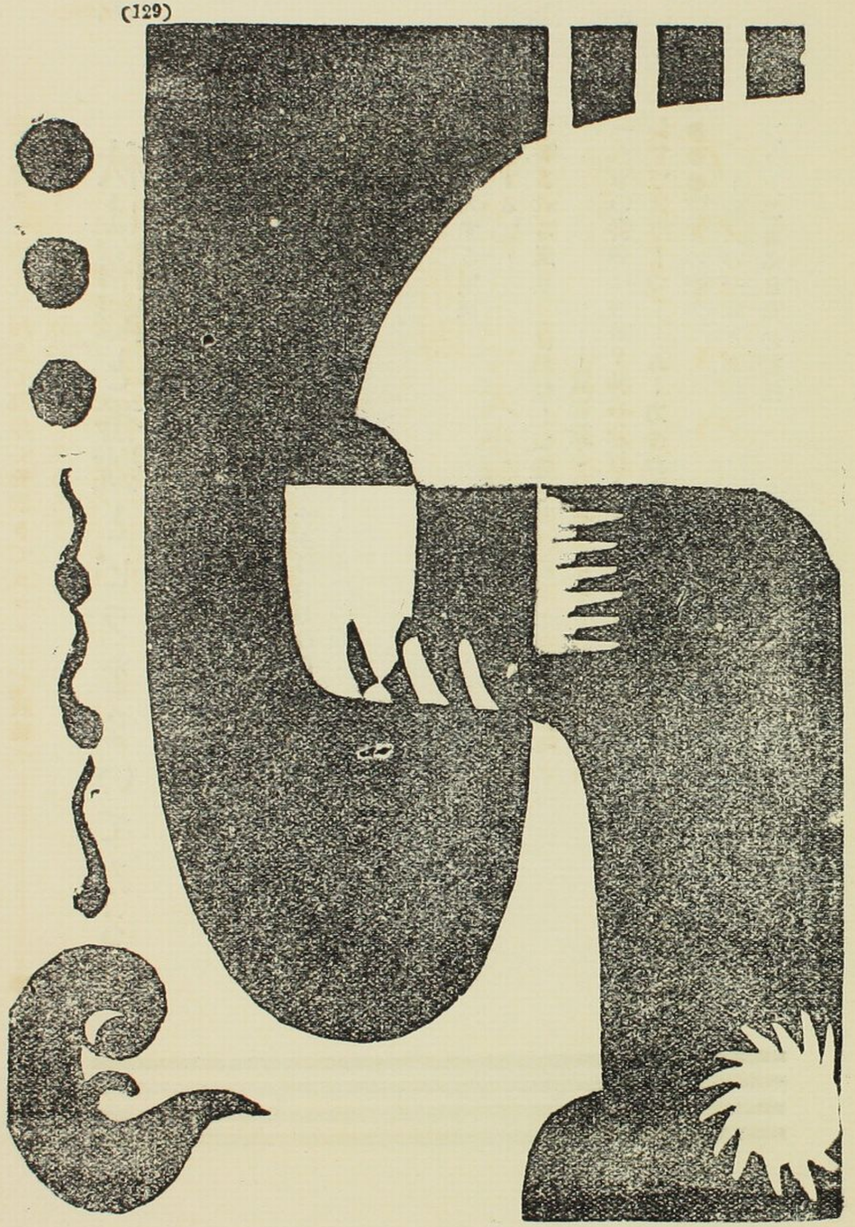
廣告燈

大なる賭賻

黑煙を吐き出す大小無數の林立する煙突

幾つかの腔と凹凸の面と數本の圓棒と
黄色と毛髮とゼンマイとコンパスと筋
とサナダ蟲と靴下と一枚の名刺！
幾つものボタンのとれた汚れたシャツとヅボンをはきかへたか知れぬ俺と云ふ道具よ！

アハハハハ——ハハハ



秋は隔離と番號とビラをまいてゐる

昇降する市街●●●●●爆音
婦人の顔面
交互に動搖するSSSTOPP＋＋＋GOOGG
乘合自動車●●くくガソリン――急角度の顔！
ダアーフ！
G
空へ突入する屋根
動亂する窓――は斜傾して走る――廣告旗！
寸斷される風景――H

「汽車の番號は何番？神戸急行よ！」
シヤツスウ！ツ――ム！カタカタ　カタカタカタ――
●●●警官の擧手
――騎兵の一隊と葬儀
＞＞＞二重に日光の動搖

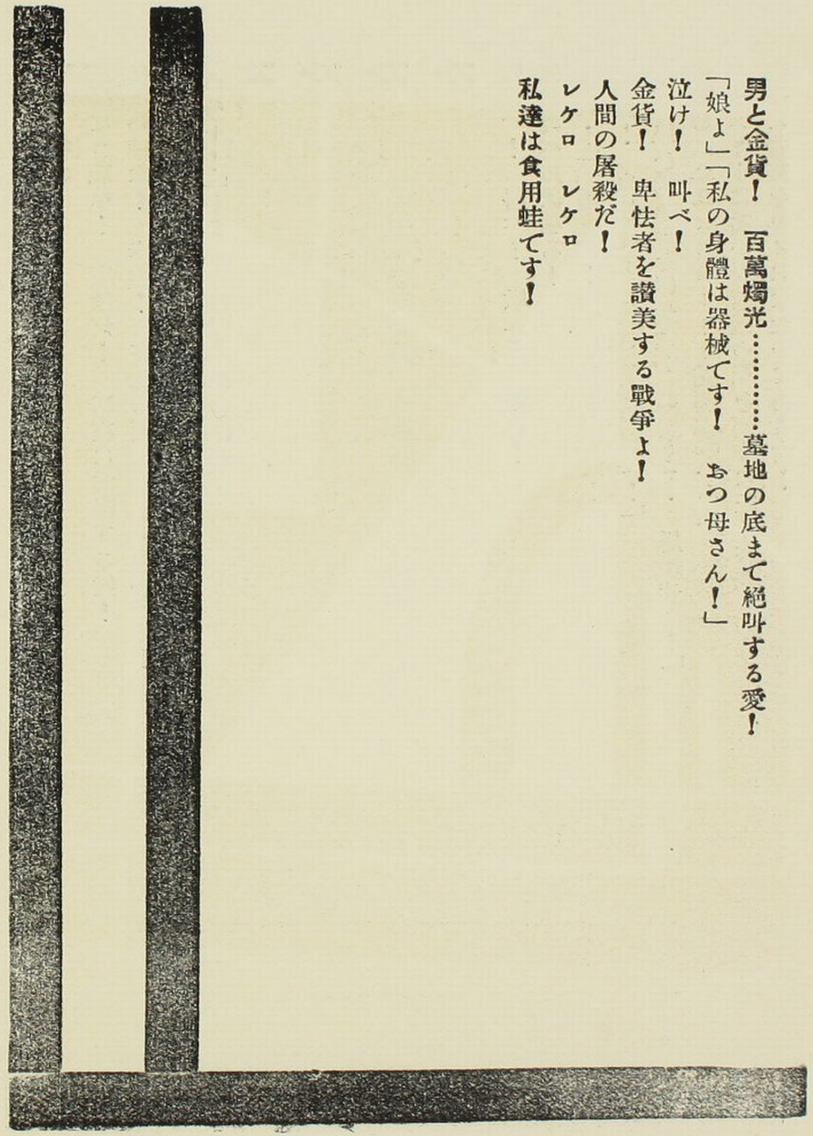
「彼の女は死んでしまつたのに――――」
海●海●海●海●海
帆船
急角度の水平線
「何番？」
「何番？」
小說本とウヰスキー
P●RRRR●●●●BBBBWWWWW
電信局の窓
垂直した戀人の足先き
秋は隔離と番號とビラをふりまいてゐる
瀛車の過過する速度
ねえ！まつたく
　わたしを忘れては嫌よ！」

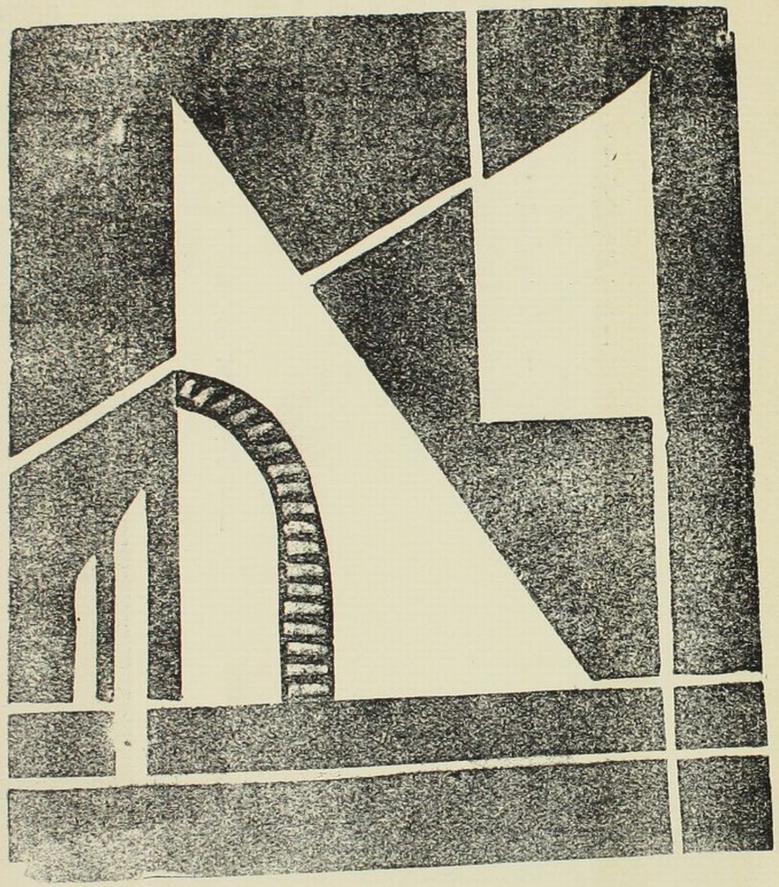
食用蛙

貴婦人の地下室●●●
私達は食用蛙です！
クロツケ
クロツケ
泣け！　叫べ！
「愛だ？」――赤い燈に破裂する心臓――「侮辱だ！」
人間の屠殺だ！
レケロ
レケロ
「倒せ！」「刺せ！」――赤い眼球！
「●●だ！」
「射て！　射て！……騒音……號令！
「祖國よ」
「祖國よ」
キロ　キロ

キロ　キロ
間斷なき戰ひ！　突擊だ！　暗夜に沈沒する艦！
卓上の噴水！　赤燈！　黃色の圓――納棺だ！
「萬歲！」「萬歲！」
「ウラー！」――死人の山だ！
R
R
R
R
鳴らせ！　叫べ！　歌へ！　躍れ！
生活のベルは鳴る！
「走れ！」「暗夜だ！」「死そのものだ！」
「死ぬ！　卑怯者！　生きる力の前に！」
「穴へ追ひ拂ふ者を罪せよ！　罰せよ！　屠殺せよ！」
●●●▲▲▲×××ーーー■■■＜＜＜
ウキスキーに咲いた薔薇の花を煙りに吐く將校！
悲痛な音樂をキイにたたいてゐる女！

男と金貨！　百萬燭光……墓地の底まで絶叫する愛！
「娘よ」「私の身體は器械です！　おつ母さん！」
泣け！　叫べ！
金貨！　卑怯者を讃美する戰爭よ！
人間の屠殺だ！
レケロ　レケロ
私達は食用蛙です！





煤煙

——強く美しく勇敢に——

生活だ！
埋めろ！投り込め！
煙突で吠える！
刺し殺せ！
塹壕だ！
首をしめろ！
鐵槌だ！
打て！碎け！何處でも挫け！
生活だ！
蓋をしろ！空氣を通すな！
踏め鳴らせ！
瓦斯を送れ！
闘爭だ！

警官を呼べ！墓へ！
骸骨だ！
シャベルてすくへ！
——叫ぶな！踏むな！
——我々は根絶しになるぞ！
——百の聲には百萬の壓殺だぞ！
——暗夜を行け！音もなく！
——百萬匹の狼になれ！
——叫ぶ側からやられるぞ！

破裂だ！破裂だ！
時だ！
機關士は自殺したぞ！
別れ去つた！
——運命に　恐怖に　金錢に　生命に
去れ！去れ！去れ！
街を！街を！街を行け！街を行け！
——無目的だぞ！
——蒼ざめてゐらあ！
——逆襲だ！

夜●●∧∧|■▲畫

見ろ！

葬式だ！

自殺だ！　縊死だ！

分娩だ！

石炭殼の工場裏だ！

隨胎しそこなつたんだ！

男は技師だ！畜生！

あの「カフス釦」のためなんだ！

金錢だ！

工場だ！

病院だ！

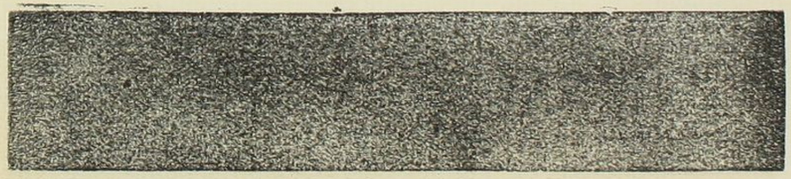
餓死だ！

妻と子だ——機械だ！

シャベルだ！

窩だ！

●投り込め！刺し殺せ！



●石炭だ！

●死體だ！

燃え上れ！　燃え上れ！　燃え上れ！

●煤煙だ！

●煤煙だ！

うすら明るく　暗い！

うすら冷く　熱い！

黎明だ！

深夜だ！

電氣仕掛けだ！

突つ込め！　ララア！　ララア！

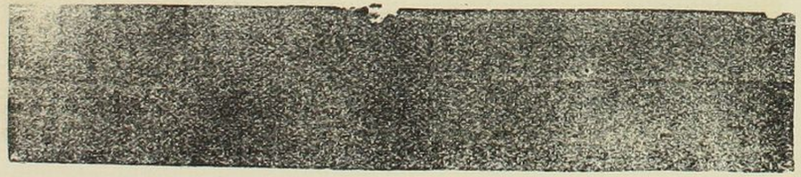
窓を開けろ！

窩を開けろ

BORA-BORA-BOOOBBEOBOOOORA！

RA——BORA——PRUN!-PRUN!-

PRUN!



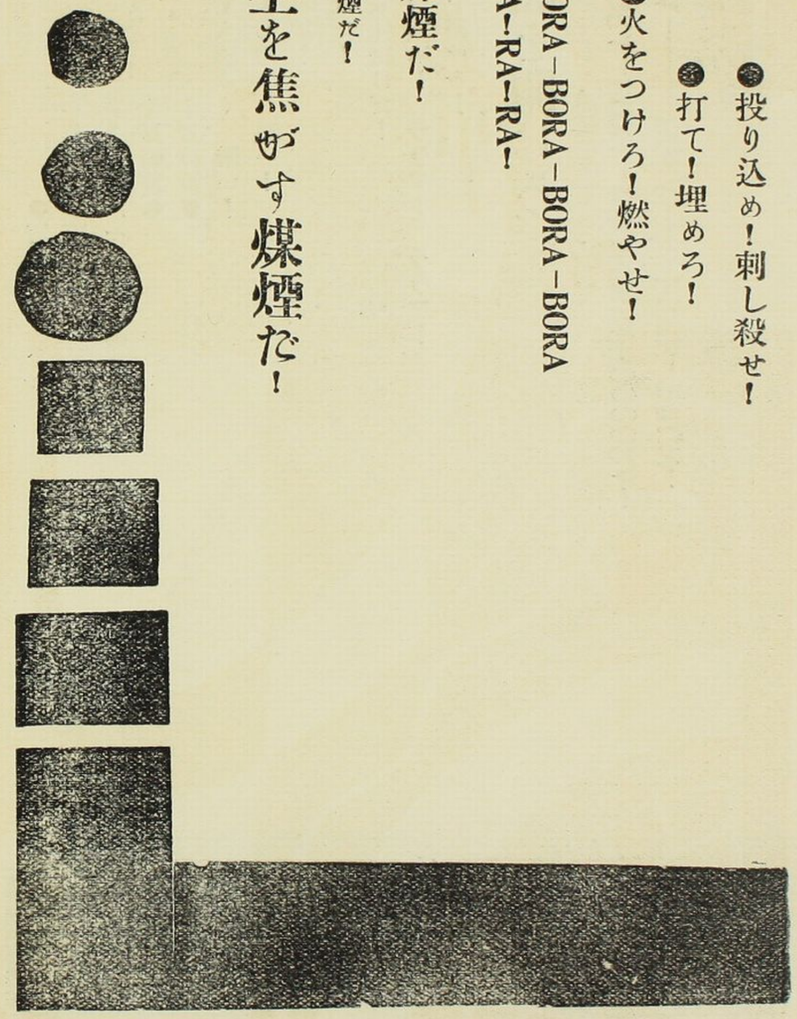
●投り込め！刺し殺せ！
●打て！埋めろ！
●火をつけろ！燃やせ！

BORA－BORA－BORA－BORA
RA！RA！RA！

煤煙だ！

煤煙だ！

空を焦がす煤煙だ！



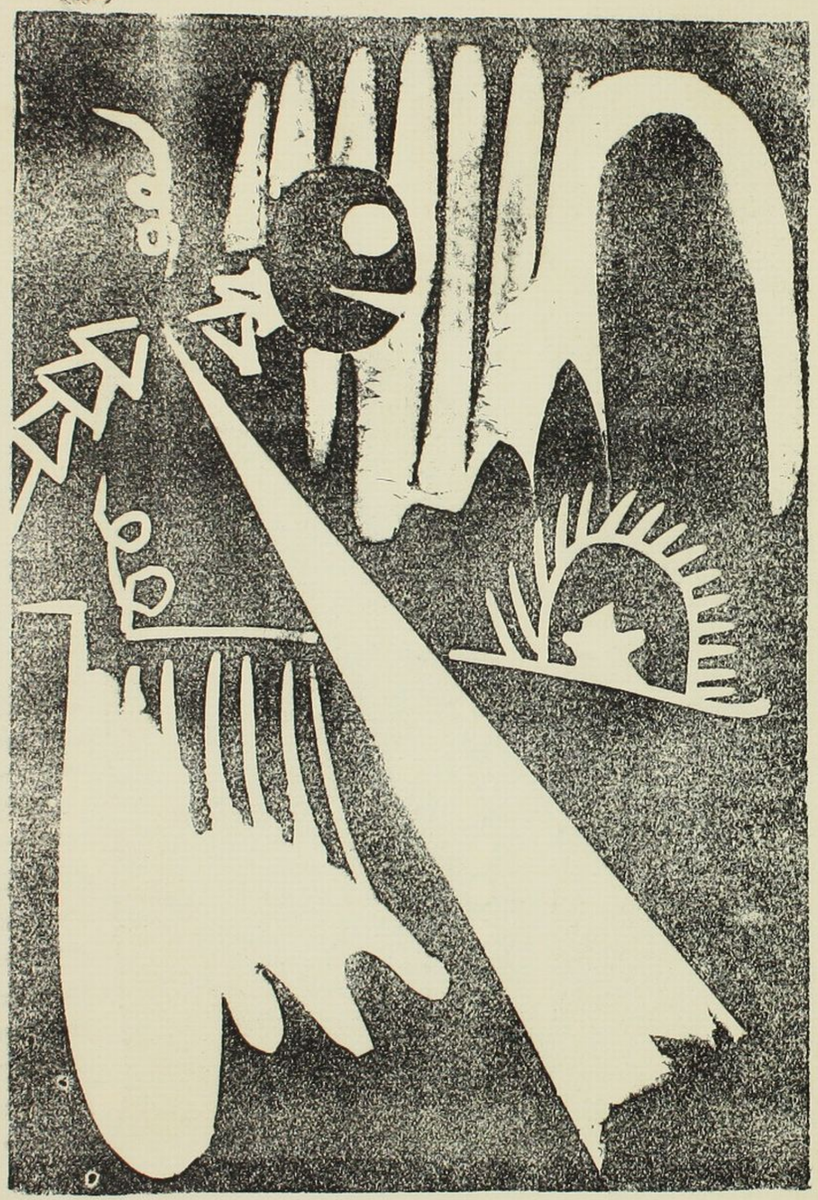
生活

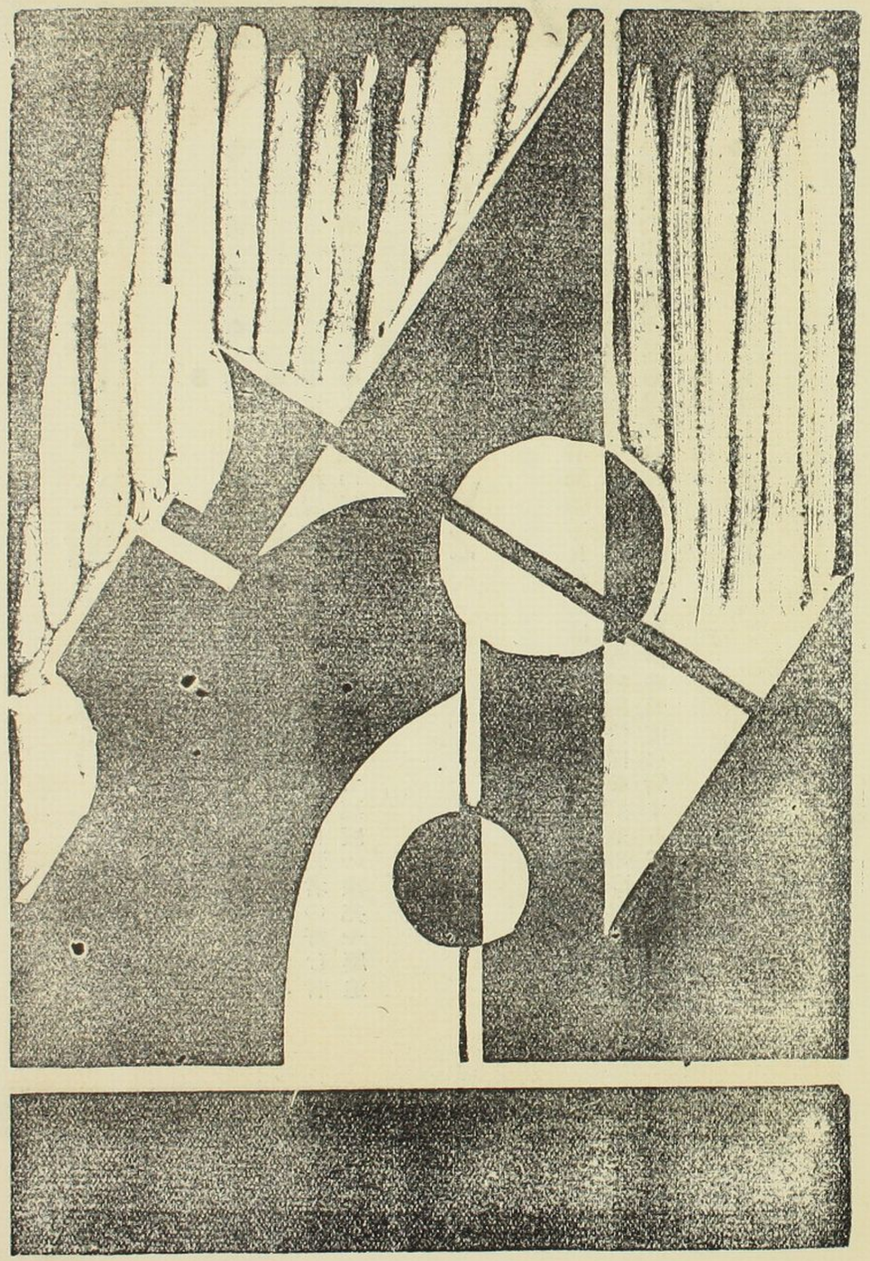
●●ボーヒ゛ヒ゛ヒ゛ヒ゛●●笑ひこける動物め！
踊れ！踊れ！踊れ！
赤い生のマスクだ！
梅毒●塵埃●唾液●パチルス●肺病●下痢●殺人●罪惡●頓死●藥品
豚め！
ふくれ上つた腕に繃帶した腕！
俺の財布を空にしやうとするのか！
死にぞこない！――――電球を中で破裂させろ！
切れたバキオリンは鳴つてゐらあ！
莫迦！
恥知らず！
職業もかうなりや神聖だ！
運搬車はまつぶたつに割られた身體を引いてゆく……

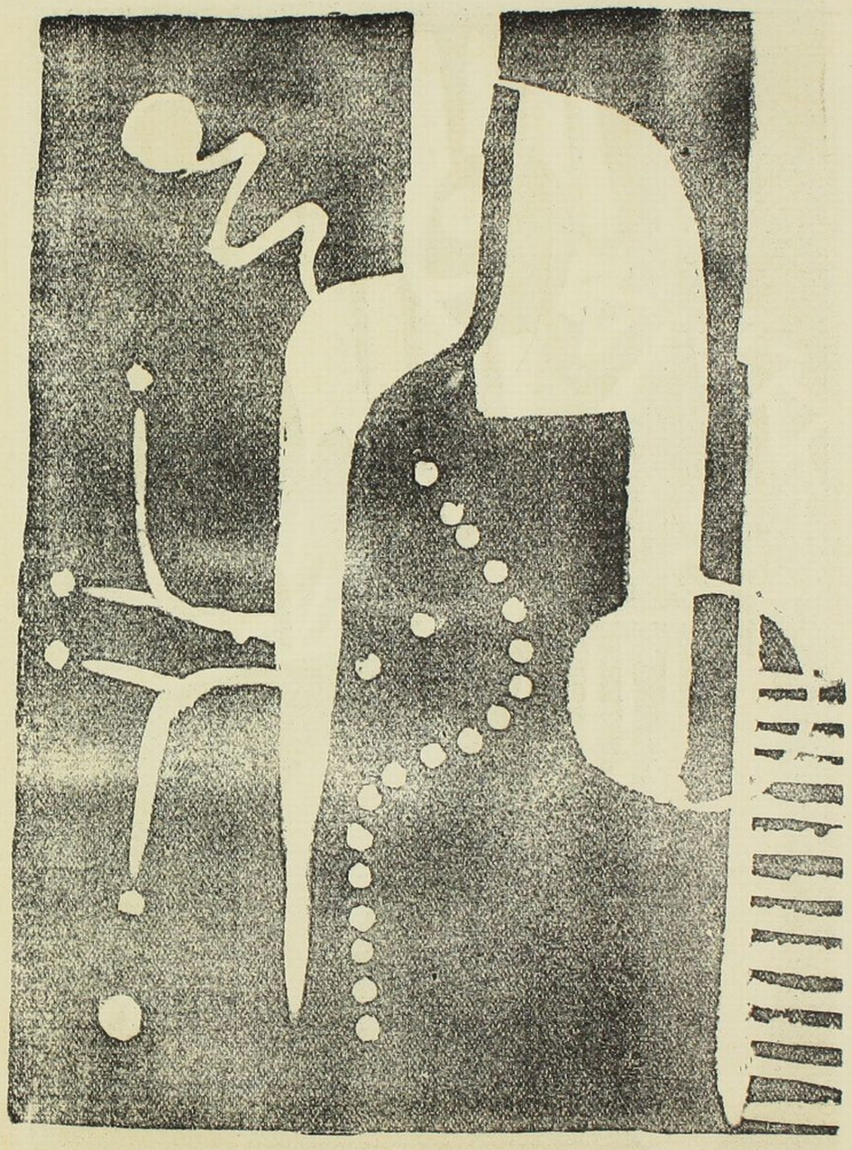
機械だと思ふのか？
生きて動く太陽だ！地球だ！母だ！
赤電車の中で縊死する運轉車！
人間だ！
漏電！
切斷された兩足！
眼球に血がついてゐる！
紫色の小便！
畜生！メガホンをはさんで叫べ！

男だ！女だ！死だ！生だ！
――――客間だ！　●●●墓場だ！　＋＋＋カルタの札だ！
墮胎だ！自殺だ！葬式だ！
齒車……齒車……齒車……齒車……齒車……齒車！
おふくろの乳をしやぶつて出て來た豚め！
踊れ！踊れ！
アハハハハ――――――ハハハハハ
女で光榮さ！アハハハハ！ハ！ハ
ぶつたふれる――――――死體！
生殖力の消滅だ！

眞白の假面！
踊れ！踊れ！踊れ！
――まあお前は可愛い、髮毛て！
死體め！生きろ！キッスだ！生きろ！
踊つて！踊つて！生きろ！
生きろ！生きろ！キッスだ！キッスだ！
人間だ！
生活だ！
女！女！女！
踊れ！
漏電だ！　銅だ！　電流が切れた！
闇の闇だ！　破滅の破滅だ！
破片だ！
經濟だ！　粗織だ！　終りだ！
生靈は天國へ飛んだ！







アルハベットに對する宣言

●

●空の濁れる日●大なる悲しみに沈みし日●別離の情●北方人の言語●貨車や荷車の坂を上る音●巨大なる鈍重さに逢ひし時●都會の下水道の音●侮辱に對する種々の感情●深夜●梅毒的病狀に伴ふ心理的作用●自殺者の好む音●胃腸病患者の味覺●工場地の屋根の空●ETC●すべて惡感の豫兆や壓迫感に伴ふ形象

B·D·G·J·M·U·V·W·Z

●

●酷暑の街道●赤道直下●昇降落下に伴ふ感情●早口●喜びや悲しみを訴へる言葉●速力的感覺●都會の眞晝間の雜鬧●機械的快感●病狀の降昇●昂奮の狂人的作用●藥品●及物●廻轉●發火や發砲●角度に對する感覺●炸裂する音響●革命的心狀●虐殺●エトセトラ

●すべて强張された速力感に伴ふ形象

A·E·I·K·O·P·R·Q·X

●

●親友と語る部屋●親愛の情●散歩●林や河流や帆船●朝の十時頃●明るい陽光や色彩や音響●平和なる二人●自動車の快走●白紙の上にすべるペン●戀人の頰や手足●收獲時の音樂●理智的な節制と伸長●音波●ラヂオ●處女性のもつ美●研究室の靜謐●片假名●自動車や四輪馬車の速力●オレンヂ水●若きマダム●エトセトラ

●すべて明快なる音響と親愛と平和のメロディに伴ふ形象

C·F·H·L·N·S·T·Y

●

我等は以上分類せられた形象をもつて、我等の內在を構成する一要素としてあるはべつとの有する音樂的●繪畫的の感覺を使用する事を宣言す！

露臺より初夏街上を見る

●ーニニニニ××××●●●●光●
茶＝ー花の自動車 音響 水 白光●
コー＝ー赤 青● 水水水水水水 光●
ヒー菓＝ー光 水煙 水光●
水‖蓋＝ー青色 白煙●タバコS●
髮水面足音＝●目●〔心臟トS●
●女の胸顔眼＝●光赤〔椅 子S● 車 W光
象の鼻白白赤赤＝●光 草S● 車●倉庫
●耳水藥ベラルル＝●光木Z● 車 W光汗 氷
葉耳●光光光青赤●＝●Z● 車●汗 氷
青●トンデモナイ●＝ 車 W光汗 氷 蟲
●ヤメイガキコエ●靴靴＝◯S車●馬の眼●尾

バチーン！煙●ピベアル光 車 W光倉庫 石灰 黑
空煙煙 煙香●眼鏡●足Q 赤旗 ◯W●C●
空空煙少／／／／／／窓P 旗×●鉄金 金貨 石炭
空空 卑／／／／／／／／P チンチンチンPPPP綠光光
無線電信 音響 力P 空氣水沫●チン花賣●綠光
ー立體ーーーー重P 雪 雪 雪● 光光チン車 紫 光
●●●●●壓力PVVVラッパ●●●●チン鈴 絶●望●
√√√√

詩集「死刑宣告」（終リ）

印刷術の立體的斷面

裝幀・リノカツト・紙面構成其他

立體から綜合へ、綜合から構成への要求は最近の形成藝術界に於ける、各種の素材及要素の發見、創造につれて益々進化し。今や綜合的社會運動藝術として各方面に實現されつゝあるやうだ。

殊にリノリユーム、カットの發見の如きは確かに出版界に於ける一つのエポックメーカーである。歐露の文藝美術雜誌には數年前からドシ〳〵使用されてゐたらしいが、我國では「マヴォ」が嚆矢を放つた樣である。

さきに長隆舍から出たトルラーの詩集「燕の書」にも二十枚近くのリノをほふり込んで置いたが、僚友恭次郎兄の詩集が愈々出版すると聞いたMAVO・NNKの關係有志十四五名は君の爲め一濟に凄い名刀を、嬉んで振り廻した。

尙　昔のマヴオ誌上からも記念になる樣な寫眞版八葉を撰り拔いて掲載することにした。それから紙質、活字、紙面構成、全體の構造等には特に注意を拂つた心算だし、在來のものよりは確かに傑出してゐると言ふ自信を持つてゐるが、何しろ三科騷動や芝居のことてキリ〳〵舞ひをやつてた最中のことゝて、抱負の百分の一も實現されなかつたことは返す〳〵も殘念である。

同じマヴオイストの中ても個人々々特有の色彩や背景を持つてゐる爲め、こゝに收めた挿畫の凡てが、恭次郎萩原兄の詩に「寸分の隙なくぴつたりする」なぞと言ふことは到底望み難いことだ。

故に活字とインテルの配置、詩と畫の組合せ方、則ち、全體から見た場合の巧果（構成）に重きをおいた。從つて印刷術に依る綜合運動の小さな試みに過ぎないこと勿論てある。

對世間意識や經濟上の事情もあるてはあらうが、當來の印刷術が餘りに平面的て踏襲的て無味枯寒でありながら、得々としてヂャーナリズムの凱歌を擧げてゐると言ふことは、何んと言ふのろまな恥知らずな事だ！

本詩集の裝幀なども、もつと大膽に各種の材料（ボロ布や木材や針金）等を使用して、詩破天荒の怪快光芒にしたかつたのだが、我々に未だ大量生産的に大廻轉をするだけの器物が具はつてゐない爲め、これも遺憾ながら中止した。他日NNKの綜合的直接行動とマヴォ劇團、自由舞臺人聯盟、都市動力建設同盟、ヌーム・ネオ・ダダイストクラブ、雜誌、パンフレット、新聞等に依つて大々的に、然も堂々と諸君の眼前におめみゑすることになつてゐる。

乞ふ。諸君よ！來らんとするものを待たれよ！

それにしても餘りに遲れ過ぎた兄の詩集！だが愈々出た！飛び出したのだ！「爆擊勇ましく出現!!」したのだ。俺達も飛び出す。先づ天

井に頭を叩きつけて、それから銀座を逆立して歩かう。それ程俺達に執つて愉快な出來事なのだ。

嬉しい――――祝はふ

ブラボ――――進め

突け！！！！！！！！！！

恭次郎

岡田龍夫

大正十四年十月十八日初版發行
大正十五年二月五日再版印刷
大正十五年二月十日再版發行

死刑宣告奥附
定價金壹圓八拾錢

著作所有
權原

著作者　萩原恭次郎
發行者　畑鋭七郎　東京市芝區今入町廿一番地
印刷者　山縣秀助　東京市芝區田村町十八番地
印刷所　山縣秀美堂　東京市芝區田村町十八番地

發行所　東京市芝區今入町二一　長隆舍書店
振替東京一五一一八番
電話銀座二二三二番

村山知義著

現在の藝術と未來の藝術

四六判二百六十二頁
口繪原色版一枚寫眞版十枚
美麗箱入定價二圓送料壱錢

讀賣新聞は本書を評して「東京洋畫界の一角に燦として一道の怪光芒を曳くものにマヴォの一團がある、著者はその盟主にして實に意識的構成主義の創始者である、著者が其の伯林時代にどうしてこの最も革新的な新眞藝術に突入したかの經路も本書によつて一目瞭然であり、又其は現世記の表現派から構成派から意識的構成主義への必然の推移を理解せしむるも充分なものである、アーキペンコやピカソやカンデンスキーの眞實を捉へようとならば何人も本書以外に快適な說明を求め得べきでない」と云つてゐる、以つて世評の一般を知るべきである、

エルンスト・トルラー

詩集

燕の書

「機械破壞者」「群集…人間」「獨逸男ヒンケマン」「轉變」等の作者、エルンスト・トルラーが一九二三年、ニーダーシェーネンフェルドの獄中に於て物したる詩集の全譯である。

革命的精神と絶望の伸吟の混淆せる美しきボロ雜巾である。

村山知義譯並に裝—岡田龍夫挿畫—四六版百六頁—定價一圓

東京市芝區今入町二十一番地
長隆舍發行